

# 川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可  
昭和四十六年十月二十五日印 刷  
創刊大正十三年通卷五三四号



No. 534

特集・はたらくうた

十一月号

## 〈朝鮮人蔘〉の効用



二千年以上

の伝統をもつ朝鮮人蔘が  
この宇宙時代に  
すぐれた薬として歐米でも  
再認識されています

ヒヤクは

この朝鮮人蔘の

有効成分をそっくり  
カプセルにつめた  
現代人の薬です



朝鮮人蔘エキス製剤

# ヒヤク

カプセル

山之内製薬株式会社

東京日本橋本町2-5



## 豚饅・焼壳・焼餃子

大阪・なんば



TEL (641) 0551~2

出張販売店

なんば高島屋/虹のまち鹿鳴/心斎橋そごう/梅田阪神/天満橋松坂屋  
京阪デパート/堂島地下センター/弁天埠頭支店/中之島サン・ストアード

訳がありそうこれ見よがしの小半日

ののしり疲れ反主流派のノルマ

ここに道あり大人の狡さに通じけり

不逞な瞳読みの深さを整える

大雷雨大観えがく永源寺

## 中島生々庵

(生々庵主幹から路郎賞を受ける尼縁之助氏)



## 千載一遇

本誌の創刊号から表紙に麗筆を賜る玉青画伯が来月外遊されるので例年より期日を切り上げて門下生の写生会が持たれ、二台のバスに分乗、予報の俄か雨など気気にかけず出発したのは九月二十六日朝九時であった。

目的地は滋賀県臨済宗大本山永源寺である。ところが現地到着の頃には29号台風と急変し雷鳴を伴うた大雨という次第。一同稍々氣勢をそがれたかにも見えたが早速身仕度を整え会館の室内からあるいは境内に佇って筆を執る。「雨には雨、風には風の大自然の息

吹きがある。これを捕えるのが南画の根本道である」日頃温情の師匠もいつになくきびしい。私は惟った。この天下の絶景である永源寺溪谷に師を開み同志と相集るのさえみなみならぬ機縁であるのに、重く流れる白雲は低迷し、山並みの雄大さは常日の数倍加。このようなことは再び求めんとして容易に求め難い出会いである。千載一遇とは特にこのことであろう。「花鳥諷詠」という心境とは全く別の閃きが川柳人としての私の頭の中をつきぬけた。

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

(路郎)

私の句

職人の父を尊敬して継がず

吉岡美房

川柳塔十一月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

中島生々庵:(1)

中島生々庵選:(4)

尼緑之助:(2)

町二と午朗:(20)

川柳初篇研究:(百)

前田喜代人・故岡崎重義・清  
川端柳風・故高須啓三味・丸

十府・岡田和甫

傍島静馬:(22)

川村好郎選:(30)

東野大八:(24)

浜田久米雄:(26)

正本水客:(40)

秀句鑑賞:(同人吟)

(近作柳樽)

早乙女主水之介:(13)

(近作柳樽)

はたらくうた:(同人詩集)

無鬼・晃男・弘朗・千翁・天笑・弥生・新之助

近詠:(29)

町二と午朗

尼緑之助

昭和の初期、「川柳雑誌」に福田山雨楼、松丘町二が盛に活躍、路郎先生を盛り立てていた。當時プロレタリア文学が流行し、マルクスも諷歌されていたので、川柳の世界にも当然影響を受け、新興だ、革新だと波を打っていた。(今もやはりあるようだが)

町二はそのような背景の中で、鋭い感覚で主張を展開、私達は大いに惹きつけられたものだ。句も清新に受け取っていた。

いたずらな鉄なりけり蟹煮られ  
秋は秋は光れるピストルか

同二

彼の尖鋭さはその後ますますエスカレートし「川柳雑誌」の進歩的ではあきたらず、遂に袂を分かつに至り、自由律川柳「手」に抛つて世に問わんとした。

醉つぱらって子の父貧しい妻の怒りへ帰る  
路次にみなぎるもののかいの三日月出てい  
る

(町二の句「手」昭和十一年十一月より)





中 島 生 々 庵 選

大阪市 西 出 一 栄

合掌の二字で結んだ無心状

変化なき日々へ煙草の癖がつき  
てぐすねに待たれているを知らぬ鮎  
背のびして月と対話の葱坊主  
生け花にもされずカンナの炎えにもえ

妹清子逝く

骨あげに夾竹桃が赤すぎる

島根県 藤 井 明 朗

家訪えれば花の中から笑顔見せ

人間の相克札束へしがみつき

言訳を知らぬ振りして妻は聞き

秋の灯に老妻と旅の話など

政界の多難野党もうろたえる

倉敷市 藤 井 春 日

書き出しがパンチ効いてる催促状  
もらい泣きの方の涙で樂に泣け

さとう壺にはまつて蟻は呆けている  
偉せな友で女でありすぎる  
ようやくと持たせた花に彩がない

広島県

高 橋 鬼 焼

思案する歩巾と他人見てくれず  
さようならやつと一人になれた酒

老兵も黙しておれぬ社のピンチ  
取るだけは取つて寝返りうつと決め  
停退のそれから犬さえ尾も振らず  
公害がとうとうかき船陸に揚げ

富田林市 岩 田 美 代

今日の風私のうわさ乗せてくる  
ちびた靴いたわるようそつとぬき

正装の妻へすまなくビック引く

不機嫌な肩と叩いてから分り

夫婦きり朝のあいさつがない

きうりの値などを話題に法事済む

満ち足りた音お茶漬けの箸をおく  
繰上げ当選爛ざなどとは言うとれず

神戸市 仲

どんたく

僕の癖九官鳥に教えられ

ハンディーを上げるとドルは円に云い

エコノミックアニマル眠むる団地の灯

食う為に飛んでる鳴が歌となり

一錢の帰える日を明治待つ気持ち

京都市 松

川 杜 的

七草もきつり覚えて旅が好き

秋雨が丁度よかつた萩の寺

幸せな柿だよお地蔵さんに供えられ

雨降れば雨の調べで塔の唄

鈴虫の口にもうまい茄子まずい茄子

倉敷市 竹

内 翁 童

遺言状だまし続けたことも詫び

ＧＮＰ国土ガタガタにしてしまい  
流れ去るから過去の美しい  
後継者育てて勇退せまられる

若い奴には負けぬと息を切らしてゐる

大阪市 福井野迷路

涼風のロマンの私語に耳かさん

味覚（三句）

久し振りかぼちゃのうまさうら盆会

夏の芋矢張り明治はうまかつた

犬に猿嫁に姑俺になまこ

時 事

通貨危機亡者が右往左往する

大阪市 金井文秋

西出一榮さん句集刊行（二句）

平凡な女一代句の光

家族減って行つて交際費が増える

腹の底ここでわかつた内輪もめ

まだ若い若いとおやじ酷使され

小説にされる女に生まれつき

青森市 工藤甲吉

死ぬことを忘れていれば保険来る

人生はつまらないなと叱られる

出す時は出すけちんばで見直され

姐板の鯉になつて心電図

民泊の一夜を包む虫しぐれ

高槻市 若柳潮花

あぶら蟬余生あまさず鳴きつづけ  
三味の胴たたいて寄席は派手に弾き

草を踏む素足の底で虫が鳴き  
やまいれて道頓堀の霧を吸い

鉢巻でその日ぐらしの汗を拭き

米子市 林瑞枝

掌中の珠一対となる式を挙げ

旅情ふと窓の夜景に浮ぶ過去  
リュック背に驟雨に濡れて行く若さ

川面吹く風恋人を待つ詩か

マンネリへ句読点打つ旅支度

宇都平田実男

明日あるを信じた亀の歩きよう

セールスマンこつそり他社の物を買ひ

草食べる山羊を羨む野菜高

倦怠期が長くてねーと子沢山

モデルチェンジと妻髪型を変えて  
いる

倉敷市 田垣方大

虫啼いて留守番よけい淋しなり  
とつくりを振つても妻はにらむだけ

貯めている噂の主の不精髭  
漫才のような話の耳遠し

底抜けた桶ままごとの風呂になり

宝塚市 傍島静馬

孝行もしたいが酒もやめられず  
胃潰瘍でないのを本人知つており

宙釣りになつて幽靈汗をかき

公害に堪えてコオロギ生き残り

溝掃除疾うにすんでる長話

岡山県 浜田久米雄

面影を探すピントがやっと合い

年寄りは入れ歯の話からはじめ

団体の旅はがやがやがやがや終る

だまされた口惜しさ相談欄へ書き

立膝をして核心にふれてゆき

豊中市 戸田古方

高野二題

奥の院ボクよりひどい松葉杖

珍らしい馬車 馬車馬の目がきれい  
雑草の強さで生きてゆかれそう

ここ掘れワンワン土器のかケラがホラあつた

沖縄の業やとそっぽむきそで

倉敷市 本田恵二朗

味方が多いはずだたっぷり持っている

めつきりとボインになつてた少し振り

悪口へ合槌打たねばならぬ義理

ぬかみその上手な嫁です美人です

西瓜の座老妻はしつこばかり食い

大阪市

大坂形水

大儲けした奴もいるドルショック

ボーナスへシワ寄せ来そドルショック

医師会が言う筈健保の寮目立つ

ふと夫婦西国巡礼思い立ち

歩くこそ値うちの参道バス走る

名古屋市

吉田水車

ピチピチの魚にすれば断末魔

ガイドさんの鼻のまるさよ滝八丁

造花かとさわればホロリ落花する

駅長さんこのごろヒゲをのばしたり

甲子園突撃ラッパもちよつと入れ

大阪市

本多柳志

いんぎん無礼未払い会費請求書

一代で返せるご恩高が知れ

礼服で来て平服へ気を使い

旅中吟

フロントの謎は父娘というサイン

往きも佳し復りもたのし旅日記

大阪市

阿万万的

飛鳥路を歩く

古き寺層の虫啼く陰があり

世に耐える姿で龜石草に伏す

山の辺の道どこまでも草匂う

静寂のたまり場そこに荒れた寺

まだ歩く道あり飛鳥は秋の色

大阪市

江城修史

美しく老いたし命ある限り

人伝てに初孫誕生聞くえにし

愛果てし男が唄う枯すすき

残り火をかきたてなさいとカンナの朱

失ないし愛かえるごと霧が這う

堺市

藤井一二三

肚の底から男を捨てた声で借り

虫の餌籠へ人間エゴも入れ

不景気の風は零細だけ荒らし

賞罰は無いが誠実語る鐵

ドルショックネオンも忙しのう灯り

堺市

河内天笑

大文字粹なはからい月が出ず

空っぽのビルから都会夜が明ける

杉木立いま満月を差し上げる

風鈴の音宿替えの忘れ物  
コンパクト・パチンと嘘をしまい込み

小松市 四方天弘実

鳥籠のせまさに馴れて恐い空  
空想を誰も知らない煙草の輪

寝転んで変動相場のニュース聞き

絞められて静脈むごい針刺され

山彦の律儀へも一度声をかけ

和歌山市 垂井葵水

錆ついているのか糸未だ切れず  
つまみ喰いしてエプロンの端を借る

傍さを語る夏足袋脱きながら  
ところ天喰い山びこを太くする

午後二時の向日葵誰も寄せつけず  
島根県 小砂白汀

句読点抜けた男でたよりなし

壺焼きになるとはサザエ腕におちず  
あざけりを半身になつてやりすぎし

燃えつきた姿のままで灰になり  
そと面をつくらううちは脈があり

東京都 増田次章

予定みな空白にして老妻と居る

見ないふりしながら見てる瞳が出会い  
お引きとり願うキッカケだけを待ち

毎日見てる顔いつの間にか老け

話しかけ思い出せないまま別れ

倉敷市 小野克枝

同じ服同じ笑顔で友に逢い

お金見て笑う本心見てしまひ

一泊の夫へひとこと念を入れ

金賞に母の瞳うるむ書道展

母が居る黙つて我慢する晴着

京都市 都倉求芽

ここと云うとこが針金手に負えず  
少し金はいって目標高くする

去にそびれたばかりに合槌打たされる  
筋道を通す勇気を金が断ち

鬱蒼と老杉分譲家わびし

伊丹市 小川静観堂

亡妻の夢（一句）

燃えるものなにも残らず我れ老いぬ  
露營のギターをまたかと阿鹿うるさがり

日本の歴史男だけで夜つくられ

先妻は三人もあり新婚やんや  
空晴れて木の間木の間の楠若葉

岡山県 池田古心

癌手術していた医者が癌で死に

旅の恥温泉町で捨てる札

猫の仔と遊んで雨の日の老爺

死の準備したのに十年まだ死なず

栗の虫イガがあるのに喰い荒し

東海林太郎の眼鏡をかけてきた女

雲波に波雲に似しはたちの日

裏窓は山下清画く屋根だ

これが死にするかとばかり瘦せている

東海林太郎の眼鏡をかけてきた女

雲波に波雲に似しはたちの日

一日は鎖一環倦怠期

大阪市 不二田一三夫

うふらも宙に舞う日をどぶで待つ

今日のドラマの序章 顔を剃る

悲劇や喜劇はあつたが活劇ないわが家

寄席(二句)

砂川捨丸師(81歳)逝く・46・10・13

六十年手垢のついた鼓 寂

古典保持 太夫・才蔵の名も消える

堺市 吉田圭井堂

株街へ包んで覗く袈裟ころも

判読でどうやらご無沙汰文らしい

海近く木のない庭も夢を持つ

三男新築

岡山県 直原七面山

おちぶれてもキットの靴はまだ脱げず

暮し向きがばれる手帳を落して来

意地が邪魔して燃え切れぬ恋

雨の日も風の日も逢い 恋樂し

束の間の逢瀬へ燃えている二人

こおろぎの一ときわ高いアリア聞く

駐車場のエンマこおろぎ轢れるな

鯛網と云うショウに出る鯛で候

完全に近く人間味がうすれ

岸和田市 高橋操子

出雲市 尼 緑之助

展示会月賦で呉れる顔ばかり

ほつて置く積りの株が日に下り

たいこだけ聞いて祭の台所

倒されても本望と云う客に貸し

出雲市

尼 緑之助

軒すれすれバスはよろよろ過疎の町

又雨か秋よ煎茶を濃く入れる

台風禍今年は梨を送らない

海近く木のない庭も夢を持つ

倉敷市 水 粉 千 翁  
揃える靴へ自信の今日を履く  
幸せをつかむ片手は肩を抱き

たくましく錆びてメックになりません  
宝石を蹴つておんなの道けわし

高槻市 福 田 丁 路

暴落の株に拘りなく昼夜  
マイカーの事故をマイカー振り向かず  
チャンスとばかり惜しみなき鼻薬

東北地方廻遊

天を衝く羽黒の杉を値ぶみする

藤井寺市

西 い わ を

白生地のままの人と思い込み

銀行が釣上げて来た角屋敷

いくばくの余命を舞うか黒揚羽

秋立つに未だ抜け切らぬ夏の風邪

倉敷市

小 幡 里 風

家計簿の余裕レモン厚う切る

お世辞を素直にうけて踏みはずし

黒い影鏡を透けている不倫

美しさ見せ老夫婦汽車の旅

出雲市

弘 津 柳 慶

大阪市 水 谷 竹 莊  
醉うて帰れば病床の妻すまながり  
人間国宝いつか変人にして終い  
左遷されて大過なくの挨拶状

鳥取市 河 村 日 満

増築をして（三句）  
一泊の佐渡は住みよいところでなし  
行きは夜帰りは寝てて富士をみず  
第二次会の払いはもてたのがおごり  
胡瓜でもまがっているのは売れ残り

鳥取市

河 村 日 満

増築の一と間ご先祖さまへあげ  
寝るこの日を夢に五十年

洗い髪妻の白髪も目立ちかけ

父に似た飲み口妻に案じられ

大阪市

児 島 与 呂 志

あつさりと夫にまかせたカロリー表

放つとけばどうにかなるさと子沢山

せい竹の歩道言い訳考える

妻の声ヒスに変つて子ら黙り

門真市

福 島 鉄 児

病床の妻へ金婚式のプレゼント

慰めの言葉もなくて受話器おく  
うつかりと聞いた話に巻き込まれ  
和服きて夏を涼しいものにする

ぶら下るようすに女は腕を組み

大坂市 木村水洞

人命が失われてからの善後策

アベックで買物に出る秋日和

不景氣を膚に感じる裏長屋

たすけ合う心長屋に受けつがれ

桜井市 岩本雀踊子

ベンだこで一家五人食いつなぎ

冬ごもり蟻が夏の陽をおしみ

松江市 中川晃男

町内の世話好きケチな知恵をかし

素顔の女は嘘をつかぬなり

松江市 吉岡透児

神話の出雲へ路郎賞抱き寄せる

作者の手離れ受賞句騒がれる

松江市 吉岡透児

万遍なく笑顔を売ってひとりぼっち

心の傷セロテープで貼りホツチキスで止め

松江市 吉岡透児

故あってのばした罷と見てくれず

菊花展受賞停年來の趣味

交通禍手相適中せし不幸

倉敷市 野田素身郎

同僚の昇進を聞く秋の暮

どこがどうというではないが好きになり  
問題は山積残暑まだ続  
修道院入りも考えていた後妻  
大坂市 有信新之助

大坂市 有信新之助

灰皿になって帰ったうどん鉢

沈黙に首振るだけの扇風機

焦心に電車も軋んで走りだし

面前で言う気のドアに手をかける

米子市 八木千代

濡れた手のまま乾杯へ妻も出る

ひとりの灯待つ夜ひそかな恋に似て

眼を伏せてひまわりが聞く秋の音

ドライフラワーそっと散りたい日もあるう

大阪市 天正千梢

選んだのは私愚痴をかみしめる

あやしてくれるから私は笑う

偉い子を持ち母も偉くなり

理屈では分らず偶然出来上がり

松江市 小林孤呂二

ほどほどの二次会へ妻は素直なり

案じられているから奮発をする土産

戦中派の名残りさよならも挙手の礼

米中のニアミスへ政治家また慌わて

大阪市 小出智子

竹原市 森井菁居

何事もうまく行く日の虫の声  
読書よりすべなき父が哀れとも  
放してやったこおろぎらしい声で啼き  
思うことあつて久しく花活けず

大阪市 河野君子

八尾市 高杉鬼遊

鳥取森山高原を旅して  
風紋となる足跡に夢を置く

父を病院に見舞う（二句）

パントマイムで語る母なり夜の病舎

孤立する娘へさりげなく味方する

仕上った喪服に心弾まない

出雲市 原独仙

島根県 堀江正朗

猫蹴って見ても溜飲下がらない  
中学の息子近頃寝押しする

言い訳けは本署でしろと無情なり

厄日無事廢家に柿たわわ

東大阪市 宮西弥生

泰平の夢をドルから驚かされ

仇討ちのようにゴキブリ狙われる

乗鞍山頂へ行く（二句）  
ようこそとアルプスみんなベール脱ぎ

道開くを信じて山頂へ急ぐ足

宝石見る女他人の目忘れてる

切られても花そのままの色で咲き

倉敷市 松下梁水

落目とはこんな祠も拝まされ

毒舌でたがいの無事を祝い合い

コーラスの声に不向きなくつわ虫  
神様の創意はさすが栗のいが  
落ち鮎の油断へ仕掛けが待っていた  
カンナ燃ゆ皮肉よ恋に破れた日

大分市 森井菁居

演出という賞讃が派手過ぎる

もう俺に入り込む余地のない故郷

岡山県 大森 娱句 樂

円相場聖徳太子ソッポ向き

犬猿がシャンシャンシャンと手を鳴らし

口先に騙されぬだけの知恵が要り

百舌啼いて陽射しも秋へ衰える

倉吉市 奥 谷 弘 朗

雑草で終る定年肩がおち

仲直りした沈黙へ雨の音

葉すれにもすぐ目が覚める老を知り

お帰りと迎える妻が居て足りる

人生を大事にしたい持ち時間

渡 辺 曜 童

発つ朝の宿の浴衣のみじめとも

すごみを欠いた夏の遠吠え

愛媛県 渡 辺 曜 童

晴読も雨読も板について来た

大坂市 中 川 滋 雀

朝詣り心の棘がひとつ抜け

友達のままで別れた深い悔い

雜念に負けまい読経の声をあげ

気にかけて呉れた便りを読み返し

愛媛県 村 上 旭 童

どっち向いても赤潮だった魚の死  
減反へついに不作の秋がくる

不意うちの秋恐しや曼珠沙華

おっさんとこで飲みなおす気の肩をくみ

宇都市 石 川 侃 流 洞

葉すれにもすぐ目が覚める老を知り

病院で飼われ雇の不倖せ

孤児たちの母のまばろし保姆ひとり

珍品が奥にあります土産店

堺 市 高 橋 千 万 子

初恋の秘密に指紋ついていた

子を産まず悔を残した共稼ぎ

バツクミラーダンプかみつきそうに見え

バイトして商売のコツ一寸知る

姫路市 村 上 春 已

新聞屋駆け抜けて今朝の道となる

もう少し化粧しろとも言いかねて

理髪屋にご無沙汰でんなど嫌味聞く

公害と言う煙突の派手な色

大阪市 吉 岡 美 房

秋を画く子の画用紙に黄と赤と

連想の拡がるままに彼岸花



人の幸素直に喜ぶ幸を知る

やけくそで来たキャバレーで口説かれる

姫路市 隠岐不醉

猫でさえ三日は恩を覚えてる

久しぶり訪ねば又かと先越され

笑顔すりや儲けたんやろとおごらす気

誰に似たうちの胡瓜は皆曲り

小松市 馬場魚山

完全な無職となつて知る暑さ

送る日の秒針無情とも思え

共稼ぎの子も共稼ぎカーを買ひ

尼崎市

高津徹也

風船のごとき名誉に甘んじる

辛抱がもう出来かねた咳ばらい

腰掛けたソファー待機の刻を聞く

その顔が妙にゆがんだ虚をつかれ

大阪市 宮地双楽

往復の切符もてない人生譜

死ねばみな元素にかえるだけかしら

聖賢の古智見習つて夢生かし

星一つ見えぬ夜空にふむ百度

松江市

柳 楽 鶴 丸

代筆だから秘密は云えませず

諫早市

原田明春

夫婦合唱三人目を産むと決め  
夢渠しヌーデイストでした見合い  
歳時記の中へ痴漢も入れておこ  
一億の中に雄も雌もいる

兵庫県 遠山可住

姫路市 隠岐不醉

久しぶり訪ねば又かと先越され

笑顔すりや儲けたんやろとおごらす気

誰に似たうちの胡瓜は皆曲り

小松市 馬場魚山

完全な無職となつて知る暑さ

送る日の秒針無情とも思え

共稼ぎの子も共稼ぎカーを買ひ

尼崎市

高津徹也

風船のごとき名誉に甘んじる

辛抱がもう出来かねた咳ばらい

腰掛けたソファー待機の刻を聞く

その顔が妙にゆがんだ虚をつかれ

大阪市 宮地双楽

往復の切符もてない人生譜

死ねばみな元素にかえるだけかしら

聖賢の古智見習つて夢生かし

星一つ見えぬ夜空にふむ百度

松江市

柳 楽 鶴 丸

代筆だから秘密は云えませず

笠岡市 出原真奇

笠岡市

河原みのる

母と來た砂への足跡撮つておき

旅好きの嫁で姑と馬が合い

お荷物になるのと病妻ちとすねる

ちょっぴりと顔が売れたで毎を立て

兵庫県

河原みのる

来年を信じる菊の苗育て

うとましきものとして稻を刈る

篠山線廃止決定

刀折れ反対幕の破れ下がり

諫早市

原田明春

出稼ぎへ便りが来なくなつて採め  
コンペアが俺等の仕事みんな取り  
ダイヤなどまだ程遠い共稼ぎ

倉敷市

谷井扇水

鳥取県 清水一保

庭の木を障子に写す月と寝る  
子が巣立ち運動会に遠く住み

豊作を氏神何と思し召す

大阪市 福井多蘭子

辻褄を合わせる言葉尻がボケ

山菜の手料理友と夏を生き

療養の日日健保に感謝して

鳥取県

鈴木村諷子

喋るのが下手な人にも役がつき  
決めた人無くてカメラへ困くなる

東大阪市 斎藤三四四

生花の涸れて退院の日の来る

奈良県

石倉旅風

腕章をつけたら平氣で雨に濡れ

大阪市 大矢十郎

産湯した姿勢にかえし納棺す

大阪市 大矢十郎

人だかり覗けば達筆経木書き

金で済むことを死ぬの家出のと  
寝るだけの家で月給皆とられ

新宮市 戰友会元班長で世話を焼き

道しるべないまま道が別れとり

奈良県 今西章雅

貧相な顔を鏡が見せてくれ

ふるさとの空氣抜いてる旅枕

片隅のコーヒー男の罠を読み

大阪市 残暑なお厳し充電したい日よ

集金に来たとも知らぬ自動ドア

大阪市 河井庸佑

今日帰える明日は帰えるの独り旅

大阪市 河井庸佑

七十の違反白バイ呆れさせ

大阪市 河井庸佑

定期券見よともしない田舎駅

大阪市 河井庸佑

男だから云えぬと妻の愚痴おさえ

大阪市 河井庸佑

薺小屋の恋過疎村に居残らせ

大阪市 河井庸佑

人だかり覗けば達筆経木書き

大阪市 河井庸佑

細くとも生きる限りをともさねば

大阪市 河井庸佑

不燃焼句焼直しする朝の目で

新宮市 木村弥栄子

美しく老いるデザイン考える

新宮市 木村弥栄子

出勤の妻に女の見える朝

富田林市 残暑なお厳し充電したい日よ

細くとも生きる限りをともさねば

富田林市 残暑なお厳し充電したい日よ

主婦業に専念しててる夏休み

大阪市 河井庸佑

籠の鳥何と思うかきよも暮れ

大阪市 河井庸佑

辻褄を合わせる言葉尻がボケ

喋るのが下手な人にも役がつき  
決めた人無くてカメラへ困くなる

腕章をつけたら平氣で雨に濡れ

油虫一匹何事ならん台所

金で済むことを死ぬの家出のと  
寝るだけの家で月給皆とられ

戦友会元班長で世話を焼き

新宮市 大矢十郎

片隅のコーヒー男の罠を読み

大阪市 残暑なお厳し充電したい日よ

集金に来たとも知らぬ自動ドア

新宮市 木村弥栄子

人だかり覗けば達筆経木書き

新宮市 木村弥栄子

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

美しく老いるデザイン考える

新宮市 木村弥栄子

出勤の妻に女の見える朝

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

新宮市 木村弥栄子

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

美しく老いるデザイン考える

新宮市 木村弥栄子

出勤の妻に女の見える朝

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

新宮市 木村弥栄子

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

美しく老いるデザイン考える

新宮市 木村弥栄子

出勤の妻に女の見える朝

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

新宮市 木村弥栄子

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

美しく老いるデザイン考える

新宮市 木村弥栄子

出勤の妻に女の見える朝

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

新宮市 木村弥栄子

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

美しく老いるデザイン考える

新宮市 木村弥栄子

出勤の妻に女の見える朝

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

新宮市 木村弥栄子

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

美しく老いるデザイン考える

新宮市 木村弥栄子

出勤の妻に女の見える朝

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

新宮市 木村弥栄子

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

美しく老いるデザイン考える

新宮市 木村弥栄子

出勤の妻に女の見える朝

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

新宮市 木村弥栄子

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

美しく老いるデザイン考える

新宮市 木村弥栄子

出勤の妻に女の見える朝

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

新宮市 木村弥栄子

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

美しく老いるデザイン考える

新宮市 木村弥栄子

出勤の妻に女の見える朝

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

新宮市 木村弥栄子

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

美しく老いるデザイン考える

新宮市 木村弥栄子

出勤の妻に女の見える朝

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

新宮市 木村弥栄子

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

美しく老いるデザイン考える

新宮市 木村弥栄子

出勤の妻に女の見える朝

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

新宮市 木村弥栄子

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

美しく老いるデザイン考える

新宮市 木村弥栄子

出勤の妻に女の見える朝

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

新宮市 木村弥栄子

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

美しく老いるデザイン考える

新宮市 木村弥栄子

出勤の妻に女の見える朝

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

新宮市 木村弥栄子

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

美しく老いるデザイン考える

新宮市 木村弥栄子

出勤の妻に女の見える朝

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

新宮市 木村弥栄子

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

美しく老いるデザイン考える

新宮市 木村弥栄子

出勤の妻に女の見える朝

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

新宮市 木村弥栄子

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

美しく老いるデザイン考える

新宮市 木村弥栄子

出勤の妻に女の見える朝

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

新宮市 木村弥栄子

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

美しく老いるデザイン考える

新宮市 木村弥栄子

出勤の妻に女の見える朝

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

新宮市 木村弥栄子

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

美しく老いるデザイン考える

新宮市 木村弥栄子

出勤の妻に女の見える朝

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

新宮市 木村弥栄子

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

美しく老いるデザイン考える

新宮市 木村弥栄子

出勤の妻に女の見える朝

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

新宮市 木村弥栄子

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

美しく老いるデザイン考える

新宮市 木村弥栄子

出勤の妻に女の見える朝

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

新宮市 木村弥栄子

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

美しく老いるデザイン考える

新宮市 木村弥栄子

出勤の妻に女の見える朝

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

新宮市 木村弥栄子

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

美しく老いるデザイン考える

新宮市 木村弥栄子

出勤の妻に女の見える朝

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

新宮市 木村弥栄子

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

美しく老いるデザイン考える

新宮市 木村弥栄子

出勤の妻に女の見える朝

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

新宮市 木村弥栄子

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

美しく老いるデザイン考える

新宮市 木村弥栄子

出勤の妻に女の見える朝

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

新宮市 木村弥栄子

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

美しく老いるデザイン考える

新宮市 木村弥栄子

出勤の妻に女の見える朝

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

新宮市 木村弥栄子

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

美しく老いるデザイン考える

新宮市 木村弥栄子

出勤の妻に女の見える朝

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

新宮市 木村弥栄子

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

美しく老いるデザイン考える

新宮市 木村弥栄子

出勤の妻に女の見える朝

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

新宮市 木村弥栄子

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

美しく老いるデザイン考える

新宮市 木村弥栄子

せせらぎが話しかけてるひとり旅

松江市 岡崎 祥月

一本の道前向きで進む道

ひとり旅妻がいたらとふと思う

我を通す一步手前で手綱しめ

大阪市 本庄 金三

金策がついて喉の乾きしる

大砂丘僕の足型置いて来る

お土産に貰うた孫の手肩たたき

岸和田市

福浦 勝晴

条件に手の込んでいる手切れ金

猿回しおのれの猿を喝采す

喋るだけ喋って営業案内書

笠岡市

木山 遠二

持つてないから取る方が泣いて居る

また来年と敬老の日が暮れて行く

漢方の世話にもなつてみる持病

大阪市 宮尾 あいき

お見送り朝の電話が邪魔をする

娘入院

病院へトクホンはつたままでゆく

手術室へゆく娘覚悟の笑顔みせ

小銭入れ今日の縮図をふくらませ

公害の世に蠅 蠅なりに生きのびる

新カナを孫の注意で改める

今治市 越智一水

月清く清く澄むから秋あわれ

石の上に降る雨を見て思うこと

安らぎの坐につき生き抜く力わく

貝塚市

野坂つき子

妥協ぐせついて本心ぼけてくる

理想とはおよそ縁ない人に惚れ

灯を消して女一人の夢を見る

西宮市

島居百酒

重役を呼び捨て辞めたのが集い

ポイントに触れて話が脱線し

切角の鵜飼ゴルフへ宵寝をし

東大阪市

竹中 肖二

うなずいて又も眠りに落ちる父

としよりの日もいそがしい老夫婦

越境の竹裏庭で良く繁り

東大阪市

竹中綾女

八月二日 九十一才の夫の父逝く

やがて名を呼べど答へぬ父となり  
これ程も瘦せられるものか父の逝く

炎天の野辺の送りは暑かりし

兵庫県 大江秋月

ローカル駅村の話題を下げるに来る

新築の柱の匂いかいで寝る

朝は盆栽夕は犬の世話を暮れ

笠岡市 松本忠三

食堂のにおいエスカレーターまでとどき

これきりのマッチへ風を意識する

入賞の友へ風呂敷貸してやり

大阪市 飛田好一

公害を知つて来たのかつばめの子

義理だけの顔を連ねるお葬式

断酒して

鳥取県 森田布堂

日の丸の旗もまばらに立つ自由

禿げたのが四五人旅で恥を捨て

標本に無邪鬼な顔が針を刺し

鳥取県 谷無閑

兎に角も縁起と音痴唄わされ  
じれったい恋だと先輩のアドバイス  
無人駅陛下迎えし日もありき

八代市 永松道雄

若い芽に押され古さが伸びなやみ  
明暗の一夜がしらむ外科病棟  
寝台据えて手ぜまな部屋住い

岡山県 出原敬一

形見分け本家は簞笥だけ残り

分校の弁当まつ茸栗ご飯

商売繁盛浮気の虫がなきだした

俄雨ミニの娘がうらやまし

是見よとばかりかわしてトンボ逃げ

墓掃除社長も今日は簪持ち

普通寺市 岩田ひさお

立闘に蜂の巣もあり楚々と住む

念入りに金をかぞえて老いを言う

ははのこと想えば虫の音が途絶え

ままならぬ恋も見ている水銀燈

暇できてパートとしてと嫁の知恵

竹生島巡洋

乱世のお市を想う竹生島

鹿児島市

土岐トク子

造反も母の涙でけりがつき

手の掌をかえし息子の毛語録

敬老はカゴシマオゴジョに今も在り

島根県 中島英子

大学に居た娘と見えぬ角かくし

ほほ笑むと模様替えする顔の鐵

過疎の里人呼ぶように虫が鳴く

堺市 吉岡青香

鄭重な電話はだかとさとられず

欠航と決めたら風も止んでいた

心にもないことが言えうけている

島根県 景山綾美

招かざる客台風のご狼籍

物言わぬ方が疲れたと言う見合い

高らかに栄光の日の排氣音



西尾栄

栗ご飯団炉裏の部屋で食べてよし  
栗ご飯自慢の母をひきあわせ

栗ご飯嫁かずの叔母のよう動き  
栗ご飯嫂の在所をたずねられ  
栗ご飯遠くで発破の音がする

菊沢小松園

若本多久志

敬老の日翌鍊と社長室

辞書にさえ古稀の稀の字は消えて無し

磨崖仏刻んだ人が生きてる眼

エスカレーターコティが匂う下に立ち

亡き人を偲ぶせせらぎ高瀬川

北川春巢

亡父五十回忌法要帰郷(四六・九)

五十回忌せめて川柳忌に合わせ

墓石は搖がず苔もむしていはず

ふるさとの道の狭さも古さなり

高速船大阪資本のしぶき上げ

高速船土産にしたい風を切り

# 川傍柳初篇研究

前田喜代人 川端柳風

故岡崎重義

故高須啞三味

(百)

藤井和雄 岡田十甫

607 はへぬきの階子の側で駕イく

眠狐

後家をする図には持仏をあいしらい  
前田「御經のくず」は御經の本が何冊も

篇三五

でなく開われとの関係であろうか。

清「御經のくず」は、御經の本が何冊も

何冊もたまるという意味だと思う。詠まれ

ているのは後家で高須説と同じだが、「キ

ザ」については、違った考え方をしてい

る。この後家は悟り切った顔つきで御經の

本を何冊も買い、亡き夫の供養ばかりして

いる。しかし、作者は、後家の本心を喝破

して「眠られぬ夜もあるはずだ」だから悟

り切ったような顔をせずに、人間本来の煩

惱の中に生きたらどうかと問いかけている

のではないか。作者はこの不自然な生活、

つまり高須説とは反対に、煩惱をぬぐい去

ついた顔つきの生活を「キザ」だといつてい

るのだと思う。

藤井「きざな事御經のくずが金をためる

也」ではなかろうか。すなわち、完全にな

いくずのようなお経を仏前にもつたいらし

川端「はへぬきの階子」は火の見櫓のことを既出「のばるべからずへ駕かきもなれ」と。既出の類句。火の見櫓のそばで、吉原通りの客を待っている駕かきの様子。高須「当時の火の見櫓は大略十町に一ヵ所建ててあつたので、たいてい駕屋はそこら半鐘の下で四手にひらり乗り、傍47清「火の見櫓と四ツ手駕、類句多し。丸・岡田」賛。

608 きざな事御經のくずがたまる也

水砥

川端「不詳。高須「後家さんへ通う坊主の表看板の「お経」は、特に近所へも聞こえるように声高々とよまれる。仮壇には線香の灰がたまっている。だが当の後家さんは仮壇の掃除より、通つて下さる坊さんへのおもてなししが忙がしくて、それが「きざな事」なのである。

くあげて金をためやがつた。半人前の坊主か、もぐり坊主への悪口。彼等の一人前面をきざとののしつたのであるまい。しかし、この解自信なし。  
丸「お経のくず」は清説に似て、読みもせぬお経本。それをこれ見よがしに仏前にそろえて、亡夫の後世を弔うごとく見せかけて「きざなこと」内証は……というのではあるまいか。自信なし。  
岡田「みんなさん上五の『きざな事』のキザを度外視しているか、あるいは現代風に解釈しているが、この当時のキザは漢字で書くと「氣障」すなわち気にされる、気にかかる意味です。(それが転じて、現代ではどうも気にかかる度外視できぬ厭味たっぷりな奴を「キザな野郎だ」などというようになつた。)さて、自解は、親であれ子であれ、また夫であれ、それら肉身の人亡くなつたあと、日がたつて多忙にまぎれて、仏前に線香を供えて読経のものおそかなり勝ち。それを仏にすまないと

気かかるのだが、ついそのわざかの時間がさけないでしまう。すなわち片付けねばならぬ些細な読経の時間……それがたまつてしまつたのを「お経の屑」と表現したのが句の山なのだろうが、いささか飛躍すぎた表現法で皆さんを迷惑したようだ。

とにかく仏前にお経を捧げるのが怠りがちでどうも気にかかる、という句であると思つています。

### 609 素見の喰残しに四ツ手ハすべり

眠狐

高須||素見は「すけん」と読み、素見物または素見客の略されたもので、すでに幾度か出たと思うが、別に登場するわけでもなく一軒々々丹念にのぞき歩いて廊内を覗ねしたもので、ひやかしと呼ばれ（この言葉は吉原の近くの山谷付近に紙をすぐ家が沢山あり、その職人等がすきかえの紙のたねを水に漬しておき、それがふやけるまで廊中の賑わいを見物して歩いたことから出たといふ）

素見が七分買う奴が三分なり 天三鶴2 て、本当の遊客よりずっと多かった。そして吉原の邪魔は西瓜を買って食つて安七松1 と、西瓜だの二、三本焼いてくんなど素見物 安七松5 のように、唐モロコシなどを買って食べた。それで主題句はその「食べから」に四

手駕の駕力キが足をとられてすべったという句だが

手駕の駕力キが足をとられてすべったという句だが、う駕かきにつかれて素見舌を出し 明四宮3 今のは駕もう帰るはと素見言ひ 一一・21 の如く、素見そのものはあまり駕には乗らなかつた。前田||賛。よくすべるのは西瓜の皮であるう。

丸||賛。

岡田||同。但し礎稿の末尾は取られた方がよろし。駕籠に乗る金があれば、吉原東西の河岸にあつた百文女郎が買ったのだから素見は全然駕籠などに乗らず往復ともテクシードなり。

### 610 百持つて当らぬ方へ遣入る也

一甫

高須||「評釈」では「百機敷、ゆつくり見る事ができる」と柳雨翁が言い、「大辞典」でも「入りの少ない百機敷へ」と解いているが「当らぬ方」とはどういうことか。百ずつ持つて押掛の来る機敷 貞一・43

の句があるので「持つて」はわかるが「当たりぬ」がわからぬ。あるいは「風のあたりぬ」か。

前田||「当たる」は入りを意味するもの

川端||同。当たるとは川柳では芝居の方へで、了解できる。

藤井||前田説に賛。当たるとは川柳では芝居のことが多い。従つて「当らぬ芝居の

百ほども追つ立てられる機敷なり 一二・23

百出しても今をも知れぬ機敷なり 一二・23 となるから、出し物にこだわっていないところをみると暇つぶしの芝居見物か。

丸||諸説、賛。

岡田||前田説、ご明解。（百機敷は芝居小

屋の二階正面の上等席の後部。いわゆるツ

ンボ機敷の類だが、上等席に客が来ないちは、そこに入り込むことが黙許されているた）。

清||同。当たつた興行では機敷が混んでくると、向機敷まで茶屋掛かりの客が割りこむことになる。そこで

百機敷承知々々と追いだされ 九・14 ということになる。当たらぬ興行の方は百機敷あぐらをかいて憎まれる 一六・2 ということでもなく、ゆうゆうと芝居見物ができる。

## 句集「水鶴笛」

送料共 六五〇円

「旅人」以後の

# 麻生路郎作品

三十五年一月号

不朽洞句帖

賀状は出しませんよと歳末別れたり

玄関で失礼をするお元日

放送もかけつ放しの三ヶ日

三十四年十一月号

— 13 —

短詩文学作品展で橘高薰風子氏が買った色紙  
苦沙弥先生そつくりと言ふ父になり

大阪通信病院川柳会「役所、独身」

食事していく役所返事せず

泣いてくれる人もないさと山登り

南海電鉄川柳会「週末」

ウイークエンドあっちで仕事して来る気

三十四年十二月号

南海電鉄川柳会「学割」

学割曰くこのボストンも借物や

学割はそこも夜汽車で過ぎました

大阪通信病院川柳会「土性骨」

ケチだとは言われず土性骨にされ

入場券車窓へまでは遠慮する

割切れば太陽さえもオレのもの

南海電鉄川柳会「入場券」

見送りの母が入場券落し

(傍島静馬)

生み落されて七十余年をウロチョロす  
灰皿へママのタバコのけむがたち  
奥さんの株があたつた湯のたより  
ゴルフに行きましたと奥さんに云わせ  
腰かけで飲んでる寛美見つけられ  
下宿でくすぶりデモを楽しめり

怒つても手ごたえのない妻で生き

新春爐辺談義に発表

新春爐辺談義に発表

# 月着陸

高鶯亜鉢

月着陸それでも地球は廻つて  
白銀色は昔も今も空の月  
陣痛は生みの悩みの素晴らしさ  
断絶と拒絕に血の川流れる  
詩を重ね月面に重ねて光る秋  
虚無感に読経三昧など無用

現実に戻れば闇にとり巻かれ  
意識下の深層にある影の僕ならぬ僕  
セックスが呆けてきている意味ない夜  
大きく高く大きく深き神は一体  
死もじせぬ妻子の利益にならぬ老盲  
晩酌の資格は零と極めつける  
コマーシャルコーヒーと酒はいけません  
貧乏レベルアップの冷蔵庫  
抜けぬままのたうち廻る蛇  
目明き故に妻いとしくぞ思う  
ボーリング首の重さへ指をかけ  
鳴動に耳すまして其前夜

斬り立て斬り立て味方はばくだけ  
僕だけ僕の影だけ延びたり折れたり  
白日夢友遠方より来る  
庶民のひとり按摩だけはごめん  
行水のたらいがせまい脚を出す  
失明を嘆う女と泣く女  
納棺には先妻も泣くだろうか  
了解がとれば女と女手を握り  
無職とは業腹著述業と書いといで  
好きなれば世話のひとつもしたくなり  
青写真はぼくにはないさ喰つて眠る  
お礼してお詫び願いをたててから一発

## 西出一栄句集・川柳塔社女性第一号句集!

麻生葭乃先生・監修

ね  
つ  
く  
れ  
す

送料共  
六百円

西出一栄さんの句集が出ました。一栄さんは故白柳さんに手引きをされて川柳をはじめ十八年の柳歴があります。ご夫君もかつては川柳を作つておられましたが、ご自分は家業に打ちこみ、一栄さんには川柳を専念させる夫婦愛は有名な話です。

「おおらかな句を作る人」とは葭乃先生の批評です。

発行所 大阪市南区鰐谷仲之町二〇 川柳塔社



# 早乙女主水之介

東野大八

「ハッ、市川右太衛門先生です。ご夫妻でいらしてます」

なあーんだ、そうかと思った。

しばらくごぶさたしても役者道楽はまだ愈らぬとみえる。初手、木暮実千代、月形竜之介、片岡千恵藏、そしてこんどは市川右太衛門ときた。息子の結婚式に、右手へ岐阜市長、左手に右太衛門さんが坐っていたのを思い出したが、右太ビキはどうもそれかららしい。若いころ、マキノ映画に凝つて岐阜マキノ覚を作つて、映画の雑誌までこさえて悦に入つていたオーラーさんだが、まさにスズメ百まで、入れかわり立ちかわりの役者道楽。

ロケにきた馬の骨でも一流料亭に呼んでの大尽騒ぎに私もアキれて、いくら中華そばで儲かるか知らんが、役者狂いはよせ、とことあるごとにおいさまめ申すのだが、年増の大奥女中みたいに根っからその病気は改まらない。

「困ったそばや大尽だ」

としまいにはサジをなげ居留守を使つてしまりに逃げのテを打つ私だったが、久しぶりにとうとうつかまってしまったのだ。

やがて新幹線みなみの高級車で、私は長良川のとあるA級旅館の玄関に下りたった。

「やあ、きたきた」

座敷の中は杯盤狼籍である。五十畳敷の大

広間の正面にいるのが、大兵肥満の美丈夫、いわすと知れた右太衛門丈。その横のずんぐりとしたネクタイ背広の運転手は白手袋で、

役者道楽のそば屋のオーラーさんが、おい大きちよいときてくれ、と電話がかかってきた。急用なんだ、向えのタクシーが一時間したらお前さんとこへ着く。夏の雨降る夜のこと仕様がねえな、いま何時だと思う、とぶつぶついいながらも着替えにかかった。このオーラーさんは、岐阜市でもトップの、麵類製造卸で、柳ヶ瀬などに三軒の直売所を持っている。いっこくもので、自分のために世間が存在すると考へてゐるへそ曲り、私より三つ上。もつ二十年この方のつきあいだ。

「ブー、ブー、おやもうきたんですか、オーラーのおびで今からなら、今夜はお泊りーそのつもりでいますよ、とカミさんがいう。出てみると前羽根の生えた超大型車が、雨をうけてピカピカ光つていて、みるからに豪勢。まぎれもなく自家用車で、中年のリュウとしたネクタイ背広の運転手は白手袋でい

る。それが雨脚の中もおいといなくさつと出でサツとあける。一人では勿体ないような朱色のソファーアームchairなどこへでんと腰を下ろすと、まるでほかアメリカ駐日大使みたいなだ、と口走つてしまつた。運転手がパックミラーのなかでニタリとする。

（鹿地亘はこうして拉致されたんだ）

と妙なことをフィットと考えると、鼻先からコルトの銃口でも出てきそうだ。そこで気安めに一言。

「よく、うちがわかつたネ」

「ハッ、お迎えを頼まれた社長様が、十分もかかつて詳細なる地図を認められましたので…。ハイツ」

妙にしゃちこばつてる。

「あんた、岐阜あたりの人じやあないな」

「ハイツ、東京であります」

「東京から誰を乗せてきたの？」

り婆さんは右太衛門の奥さん。そのまた横に三遊亭歌奴みたいな。美女が一人、オーサーの横に艶然と座っている、誰かわからぬ。

私の紹介が終つて、美女の横にできている

「さて、これで揃いましたので、連判状を

とオーサーがいう。三宝のつて金しゆうの豪華な一巻が現れたので、美人にひろげて貰つたら、三日月党連判状と書いてある。

「右太衛門さんのオハコである旗本退屈男の早乙女主水之介の表看板、向うキズの三日月からとつての三日月党というわけ。わしは

今日から岐阜城代になつた」とオーサーさまは、酒で真赤になつた鼻をなでなで私にいう。まま、どうぞいっぽい、という声に前をみると、その向うキズのお殿様が自らのご出馬である。辱けない、と遠慮なくうけると、おばあちゃんまで横にいる。

そんなわけで、居合せた地元芸妓五人のやつぎ早やの、かけつけ三バイもあつてやがて私が、先客連の酔いの水準にまでせり上ることができた。歌奴みたいなのは名刺をみると興津要早大教授。「落語」という本を書いた人物でヘエーと愕く。連判状には、稲垣浩、五所平之助、落語家が多くて小さんを筆頭に馬之助、円葉、円鏡、柳朝、金馬、夢漁、三馬平、猫八と目白押し。三日月党の結成は、興

津先生と柳家小さん師匠に馬之助ニイさんが起人だそう。右太衛門ご夫妻は、みた眼とは逆にひどく庶民的で、気さくな話好きの

老夫婦といつた感じ。みなさまのおかげでこのような会ができる、江戸どころか岐阜の城下町まで、三日月党に加担する方が出現されま

してと如才がない。

主水之介老夫妻が外交辞令のあと消えていつたので、やれやれ酒の味がでてきたと、やら隣組の美人の方へ向きなおり、名前をきくと大映スターの阿井美千子だという。

「ホウあなたが阿井さんね、ボカアー雷藏さんの眼狂四郎に、貴女の奥女中がゴーカンされるところを覚えてますよ、名演技だ」

あら光榮ですワ、とそこは人気稼業、そのときの奥女中そつくりの色っぽい眼つきでついてくれる。

こういうことから、この忙しいのに右太衛門後援会でもある岐阜三日月党という本の製作を命じられたことだが、その編集の最中に右太さんご夫妻の愛息北大路欣也が名古屋の御園座へきたのでインタビューのおまけもつくる。「なよたけ」の公演である。

「うちのおやじ頭が古くてかなわん。もつともおれのお師匠でもあるので扱いがむつかしいこともある」と彼はきばきと話をする。彼と約束の場所へ、真赤な半袖に、トンボめがねをかけたフ

ーテン風がきたので、よくよみたら当の欣也クンだたのには愕いたが、私のみてる前でサントリーの角びんをコロリと独りで空つぽにしたのにも愕いた。

市川右太衛門は、でっかい顔と大きな眼玉で、五十疊敷にはねかえるほどであります。こんな役者はもう日本には出てこないだろう。屋敷は本所割下水、直参旗本千二百石、劍は諸羽一刀流の正眼くずし。高島屋別製の一つ七十七万円もする衣しゆうをとつかえ引きかえ着て出る。この退屈男が、なんと戦前のスクリーンから数えて三十三本も撮つたのだそうである。

退屈男は、自分の人生をその身分故に退屈し、おしゃれと酒の中で、悪い奴に挑戦することで生きていく。この単純で通俗そのものヒロイズムに、三十三本のフィルムで庶民がついてきていたということは一体なんだろうと、私はその当座想つたことである。過去への郷愁は若さを托した哀歎につながる故にひとつしおだが、そのそばくんな人間性は、川柳にも通じていそうである。向う傷の退屈のお殿様は、川柳の風の中でもさつそうとカッポしていく。その道にお殿様の息子がトンボ眼鏡で赤いシャツをきて歩いてもいる。この風景もまた今どきの川柳にも、ムリからぬ成り行として、ごく自然に、私は受けとれてくるのである。

同人吟

## 秀句鑑賞

前月号から――

浜田久米雄

### 髪洗う男の線は絵にならず

傍島 静馬

なる程昔から男が髪を洗っている絵は見受けられなかつた。男が髪を洗う時間は大体において短かい。石鹼をつけて両手でがさがさとかき回し水をかぶればお仕舞いである。首筋に肩に胸にどこを見ても色氣がないのだから絵にするどころか振り向かれもしない。その点女の髪洗いは情緒たっぷりで一瞥も二瞥も与えたり絵にもなる。

### 宝くじ本気で望みもちはじめ

本多柳志

作者には失礼に当ることになるがこんな気持ちを持つ人もかなり居ことだらう。それはもち論一攫千金の夢である。金がほしい金が要るといういらいらした気持ちが昂じてく

ると毎月くじを買うようになる。買わなければ当らない。買っておけばいつかは当るのだ。いや当つてほしい。人間の欲はどこでもころがっている。

ゲンコツで泣いたあの日がめぐり来る 小川 静観堂

### 冗談にとまどつてゐる未亡人

直原 七面山

七面山張りの句である。冗談をいう方はそれが程本気ではなくまあからかってやろう位に飛ばした冗談であつても、これを受ける未亡人の側にして見ればある程度本気にならざるを得ない。未亡人の立場、日々の生活にひけ目を感じているとなればおいそれと受け答えができるものではあるまい。返事に困りとまどう未亡人の可憐さがうかがわれる。

### 鳴かず飛ばず借金だけがない取柄

今西 章雅

平凡で地味な生活をつづけている人の自嘲の句である。ぱりぱりやって見てもよいがやればやるだけの費用が要るし借金もてきて来

汗もかかねば日本脳炎にもならない。ましてこの頃のこと交通事故にも遭わないだろう。子のすすめでする星寝まことにありがたく結構なことではあるものの年寄りには年寄りとしての考え方もあるのだが若い者に抵抗しても始まらない。ここが年寄りのあきらめどころだと悟れば家内は安全である。

### 老いて子に従う星寝させられる

飯田一治

社告

正本水客氏が今月から「秀句鑑賞」の執筆陣に加わりました。

川柳塔社

# 近作柳樽

## 秀句鑑賞

前月号から

### 正本水客

#### 鈴虫を貰つてもらう茄子を切る

里 小路

心をこめた道具を持たせて娘を嫁入させる親の心境と同じである。それが少々緑の虫であり、一片の茄子の紫であろうとも、切るの二字が句を引きしめている。秋の夜のように。

#### L寸は着ても上位に遠い妻

堀江芳子

自分の命が惜しいのではない。不自由な夫のために生きていて上げねばと思う、長い間病のために注射を打つ場所もなくなつて了つた腕を眺めながら。切実な妻の心である。

#### 阪上十止庵

大柄で気のやさしい奥さん的人柄がしのばれて、ご夫婦の和やかな生活振りも眼に浮かぶ。

#### 墨流すように宍道湖たそがれる

東原稻子

▼ 雜訣のこの句には、なるべく本社の柳箋を

### 平行線きびしいものをうちに秘め

榎原秀子

マル生運動とかで国鉄当局と国労とが激しく対決しているが、労資という二つの線は相交わって傷つけあうものでなく、鉄路のように両立して仕事をして行くべきものだと私は思う。だが互いに馴れ合いになつてはいけないことを、きびしいものをうちに秘めてピタリと示している。

#### 壁紙の両はし持つたままけんか

樺村ふみよ

何でもない言葉の端からだけ、両端もつたままの情景から今にもブツと吹き出してしまったような雰囲気も感じられて楽しい。

#### 蓮の花ひとひらゆらりと鯉の背

高杉千歩

花ひとひらと鯉の背と、日本画をみるような静けさ。平板になり易い句題をゆらりとの一語で美事に流动感を盛り上げている。

#### 心では和解だまつてビール注ぐ

山形春海

新しい発見という訳ではないが、ほのぼのとした心の移りが捨てがたい。

#### 向日葵の自信 灼熱に立ち向かい

増田竹馬

すべてを焼きつくすような太陽へ真直ぐ顔を向ける大輪の花の力強さ、自信といきつた擬人法も面白い。

#### ノースリープすでに天下の秋を知る

坂本安代

天下の秋を知るという大時代的な語に対して、ノースリープと肩透かしを食わしたあたり爽やかな句である。

夕闇が湖の表面を包んでくる、墨を流すいう古い言葉を持ってきて、生きているたそがれを表現した手腕を買いたい。

#### この星の下で幸福掴めそう

垂井千寿子

現代の若者達の多くは自己主張だけを強く押し出してその実ところの奥で満ち足りないものを感じているのではないか。このとげとげしい星の下で本当の自分を掴める人は幸せである。

#### 三人の子それぞれに車で来

松高秀峰

私も四人の男の子のうち三人が車を持つているので、それぞれにの中五に句主の気持が出ているのがよく分る。子供の成長と車の便利さを喜ぶ反面、事故の心配がどこかに付きまとつ。

#### 本物の恋ゆえ素手でつかまえる

高杉力

なり振りかまわざ恋し相手に体当りしても、素手たとえ掴んだ指がバラバラにならうとまだ上九本物の恋ゆえと説明をしてしまわない表現が欲しい。

川柳五十三次（十四）

富士野鞍馬

ちるといわれていた。それで住持が下ろして埋めてしまった。というのである。一九の「膝栗毛」にも、「伝へ聞く無間の鐘はその寺に名のみ残りて今はなし」と書かれている。その辺が「小夜の中山」で山ひるにこまるは夏の無間山

巨眼（一四〇八）

25 日坂

金谷から日坂までは一里二十九丁（七・一キロ）である。その間に、西行の歌、

年たけてまた越ゆべしと思ひきや

命なりけり小夜の中山

夢中（二三三四〇）

で名高い「小夜の中山」がある。その道のまん中に「夜泣石」があった。広重の絵にもその石が描かれてある。

じやまな石夜はひとりでかなしがり

（二三三〇乙）

夜ルは泣き昼は旅人の邪魔になり

（二一三三）

行列を堅さきにする夜泣石

朝霜にきえて涙の夜泣石

（一五一四）

中山は右四目屋はくすり也

春森（三〇三八）

などと川柳に詠まれ、その石が夜になると泣き声を出したというのである。

昔、日坂に妊娠していた女があつて、金谷の里の親を訪ねる途中、この小夜の中山で山賊に切り殺された。その時の血が石について

24 金谷

金谷は、島田から大井川を渡って一里（三・九キロ）遠江の国になる。

一里塚島田金谷に一つづつ風松（一一二九）

「越すに越されぬ大井川」を渡れば、誰も

ほつとした話であろう。

蓮台にのりしほく地獄にて

おりたところがほんの極楽

と、一九も戯作している。川柳もまた、

島田金谷はきん玉ののびぢぢみ

雪友（一二三二）

股倉の首がぬけると金谷なり松葉（一二三三）

またぐらの首がとれると遠江五島（一二三八）

蓮台を下りて汗かく九十月（武一七一四）

れんだいで花よめおくる金谷宿

（安六松二）

と作っている。渡つてしまえば、太降りに金谷泊りは高枕

（通雅一二二一六）

というところになる。  
しかし下り旅客は、川留になれば、  
退屈さ川を越す夢ばかり見る

川留に碁盤の外はつばをかり

と、対岸の島田と同じ状態で、

金谷から白挽唄を覚えて来

という人もあつたであろう。また、

川留に無間の鐘へさそはれる

という句がある。無間の鐘というのは、

金谷だち無間へ廻り昼になり静春（八〇二三）

金谷立無間で昼の飯を食い静原（一二二三）

梅が枝も見えるは春の無間山

（一三三三）

と詠まれているよう、日坂へ向う途中に無

間山というのがあり、そこに觀音寺という曹

洞宗の寺があつて、その寺にあつた鐘が「無

間の鐘」である。この鐘を撞くと現世では福徳長者になれるが、死んでから必ず地獄にお

夜な夜な泣き声を発する。というのである。

ところが、この女が日ごろ信心していた觀音が僧になつて現われ、女の腹の子をとり出して、付近の女に養育をたのんだ。女は飴でその子を育て、子は成人して母の敵を討つた。

という伝説がある。それでこの名物に「あめのもち」がある。一九の「膝栗毛」に、「やうやうさよの中山たてばにいたる。こ

こは名におふあめのものめいぶつにて、しろきもちに水あめをくるみていいだす」

とあり、

飴のもちでもだまらぬは夜泣石

寿(一三七)

夜泣石側にありたきうばが餅

錦糸(一三六)

日坂は食はれぬを繩にない

名高い歎日坂と首陽山

玉草(四一三八)

伯夷叔齊日坂へ来るところ

木賀(六〇二〇)

と川柳にも詠まれてゐる。

この夜泣石は、今国道ぎわにうつされ、伝説も消えかけている。この坂を下りたところが日坂である。名物にわらび餅があり、

ぜんまいの餅だといつて笑われる

小柳(八〇二一)

日坂は食はれぬを繩にない

名高い歎日坂と首陽山

玉草(四一三八)

伯夷叔齊日坂へ来るところ

木賀(六〇二〇)

などと川柳は、中国の伯夷、叔齊兄弟が首陽山にかくれて、歎ばかり食つて餓死した故事

(武五二九)

わらび餅さよの中山中々に

などと川柳は、中国の伯夷、叔齊兄弟が首陽山にかくれて、歎ばかり食つて餓死した故事

を、わらび餅に附会している

## 近詠

須坂市高峰柳児

日本語がないわけでなし仮名で書き  
朝の日を拝む姿も仏さま  
いくつかの嘘も交えて雄弁家

和歌山市秋月宏方

重役のきびしさ眼鏡つかい分け  
澄む月へ深呼吸して立ちつくし

衣替えまだ派手とせぬ更年期

休田に隣りのみのりまぶしすぎ

大洲市米沢暁明

高ものに屑屋にべない棒秤  
募金箱澄んだ乙女の目にまけ  
秋蠅のよろよろ軒の吊るし柿

岐阜市市川鱗魚

日本のこころすすきの搖れに知る

公害と云う名に罪をなすりつけ

名刺の裏に金にもならぬ役を刷り

勝手つんばも生活の知恵

今治市長野文庫

癪村にもの言いたげな道祖神

この夏もこの海で足る地平線

噴水に来てガイドさんもほつとする

美しきものみなか細き命もつ

酔つたのが靴替えられた方だった

遺句集で白柳笑顔でござんさん

今治市月原宵明

か細き命もつ

酔つたのが靴替えられた方だった

遺句集で白柳笑顔でござんさん

小松市山上千太郎

か細き命もつ

酔つたのが靴替えられた方だった

遺句集で白柳笑顔でござんさん

柳近  
樽作

A small, stylized illustration of a horse-drawn carriage or sled, positioned at the top right of the page.

島根県  
安  
達

潮音

美しい花びらにさえ裏表  
寄り添うて貧しさなどは口にせず  
天高く布団叩けば音が登み

ささやかな伴せ靴音高き子と

大阪市 黒田 真

午前様迎え他人めく心  
雲の波方夢みて文胸えり十

雲の彼方夢みてて女胸笑やす  
高野詣で

振り向けば高野の峯も夜の彩  
大阪市  
阪  
上  
十

愛嬌も人工甘味めくスター

保安帽何が建つやら知らぬ身に人の背を見つめ見つめて無事な日々

友情の限界聞いてやつただけ

## それぞれのしつけ小児科の待合室

オペ終えた青年医師の瞳を信じ  
くされ縁などもう言わず子を凝視

いてくるごとし  
島根県 堀 江

川村好郎選

忘れるとわたしの好きな合歓が咲き

姫路市 小

教室をカブト虫が這う新学期

事故死の児の机に沈む新学期

遭難の場所をカモメは知つて居る

円もドルも縁なき衆生の満員車

竹原市 三

ずくずくなつて野仏笑み給う

兜虫薬を呪んで死んでいた

石ひとつどけひとつおく人の世か

部屋の隅悔あるごとし夜の秋

守口市 岸

嫁が来て養老院を禁句にし

親切をそのまま受けぬ眼が返る

幼虫の過去にふれまい揚羽蝶

さあ買えと心斎橋は秋の色

島根県 錦織

カタツムリどの子も御先祖の紋をつけ

娘の晴着今縫い終えた小さい幸

病棟へ心のせたい飛行雲

原色に燃えきる花を羨やみて

愛媛県 小笠原仲美

つき合えば好青年の長い髪

ピエロ今演技の為の髭を剃る

台風予報明日は新聞来ない島

自由朗

畑

不朽

さる

大東市 荒

本宅

湿度計

心の色

も染めわける

秋ひそか

今日は鏡へ帶をしめ

庭師の手借りれば石がものをいい

ロングヘヤー乱してさつとつむじ風

マネキンが水着を脱いで秋となり

氷壁で生命が揺れているザイル

フロントの埴輪パチクリ何を見る

豊平次

島根県 棚

久々に揃えれば箸もよく動き

庭の石一つ一つの顔になる

すがり切る身のやすらぎをかみしめる

病室の古参にされて夫わびし

島根県 東

満たされぬ若者バイク音高し  
さるすべり今日未だ赤く赤いま  
湿度計心の色も染めわける  
秋ひそか今日は鏡へ帶をしめ  
庭師の手借りれば石がものをいい  
大東市 荒

さる

木鶴

島根県 棚

ロングヘヤー乱してさつとつむじ風

マネキンが水着を脱いで秋となり

氷壁で生命が揺れているザイル

フロントの埴輪パチクリ何を見る

島根県 棚

久々に揃えれば箸もよく動き

庭の石一つ一つの顔になる

すがり切る身のやすらぎをかみしめる

病室の古参にされて夫わびし

島根県 東

いもの葉が露をこぼさぬようく揺れ

倦怠期の妻に金魚よりどころ

残された子と初盆の灯を送る

夕映えが悲しきまでに過疎深く

病院のベッドも慣れてすぐ眠むり

異状気象寝やすい風が吹いてくる

原秀子

木

鶴

翠

島根県 棚

ロングヘヤー乱してさつとつむじ風

マネキンが水着を脱いで秋となり

氷壁で生命が揺れているザイル

フロントの埴輪パチクリ何を見る

島根県 棚

久々に揃えれば箸もよく動き

庭の石一つ一つの顔になる

すがり切る身のやすらぎをかみしめる

病室の古参にされて夫わびし

島根県 東

いもの葉が露をこぼさぬようく揺れ

倦怠期の妻に金魚よりどころ

残された子と初盆の灯を送る

夕映えが悲しきまでに過疎深く

老化現象とは情ない診断

鳥取県 林

手花火に妖しくきみの面が映え  
すれ違うオーデコロンを振り向かず  
滝飛沫幻消えた岩の肌  
寝ころんで見たい機窓の白い雲

守口市 野

呂 杜 月 枝

虫たちのオーケストラきき過疎におり  
ハイミスを抱えた親のしわも増え  
百舌一声群雀しばし鳴りひそめ  
訪う人のように野分の戸を叩き

島根県 志

賀 美 栄

功五級墓石苔むし世は平和  
禁煙の出来ぬを自嘲してベッド  
残り火が時に邪道に向けて燃え  
大胆なハイカーに紅葉赤くなり

新宮市 川

上 久 司

合せ呑む度量を持たぬ瘦せがらす  
鳴りたくはない日もあるうに風鈴の  
逆らわぬ夫の厚みに支えられ

島根県 山

形 春 海

言い負けてからは息子がたのもしく  
真剣な顔パンコ屋で見つけ  
昼寝した顔か囂をつけた来る  
合槌を打つたばかりに長話

大洲市 堀

内 晓 風

妻と娘の不平夜市に捨てに出る  
部品まだそのまま古稀にたどりつき  
代筆より母の当て字にある温み

浦和市 小

嘉 数 千代香

父と子の対話平行線のまま  
民宿の主人よし話し好き  
パラソルの指図通りに漕ぐボート  
言い勝つて心淋しい帰り道

今治市 原

田 輝 親

院号の無い墓心易う見る  
片膝をつく葬屋根の台風禍  
稍翔つ二羽の鳥の秘め言や

岡山県 嘉

崎 寒

デザインは私わたしが織つて着る  
妻でさえ知らぬ闘志で靴を穿く  
冬壽に似たる疼みよ明け近し

高知市 竹 寛

映画「ガラスの部屋」より  
かき鳴らす弦燃えてくるため息よ

秋の雨言葉少なき妻と寝る

羽咋市 三 宅

ろ 亭

別離とはこんなに愛が哀しいの  
落ち葉降る彼方へ愛が消えてゆく

竹原市 楠

ロマンティックな名で月見草夜を咲く

迷信を笑える人の偉よ

幸薄き花ばかりなりバーの椅子

守口市 樋

体験がそのポイントを忘れない

大阪市 柳

灼熱へ蘇鉄は緑を吹き上げる

捨てられたはずの過疎地の素晴しさ

岡山県 山

虫の音が聴えぬ身にも秋を知り

夫を待つ台所だけ灯がともり

孫への道は乗り替えも苦にならず

七尾市 松

銚子振る辯がついに出た披露宴

廃屋と共に軍靴の感謝状

逃げるまで待ってる肩の赤トンボ

老人の日に老人の自殺記事

一服の茶に茶柱が二つ立ち

待合室夫婦交互に腰を掛け

竹原市 生

見つめてる愛は不变のものだろうか

花となるつぼみ静かに時を待ち

教会の鐘はまっすぐに聞こえて来る

米子市 石垣

公害に街路樹秋も待たず散り

陰暦も今宵は月の見えるとこ

なよなよとしてコスモスの咲きつづけ

鳥取県 両

靖国の父と同なんじ年になり

真相を打ち明けられた方も泣き

少数で吐く正論はもみ消され

鳥取市 近

凶作の故郷の便り胸を締め

図書室にひつそり一輪挿の菊

雨男の異名貰つて雨に去る

弘前市 福

出稼ぎの先から実り問う便り

誕生日妻の心がにじむ膳

胃を切つて番茶がうまい今朝の床

新潟県 高

恩給で酒もひつそり飲む暮らし

梅漬けのいつかなくなる暮らしぶき

笑わせて帰った仲のいい見舞い

松山市 谷

老人の日も働く靴を穿き

はち切れる若さにホットパンツ堪え

蘭の香が二階へとどくよい寝覚め

のぶお

垣花子

川洋々

藤秋星

澤淳一郎

野不二

沼澤

近藤

高橋

高野

福澤

高橋

まごころにふれて心の銷が取れ  
虫鳴いて虫鳴いて思案がまとまらず  
面影を消し度い女が胸に住み

藤井寺市

古

今更に時効のようなひとに遭い  
それぞれの暮らしの枷に居て想つ  
幸わせに過ぎて幸わせ気に召さず

大阪市

河原林

結百水

人生のあまから知った鬢の霜

さりげなく席を譲られ歳を知る

仮面まで替えてもネオン追う男

大阪市

西本

比呂路

夫

お互いに叱られている平社員  
氣の合うた友あり彼も平社員  
ポケットベル雲雀のような音で啼き

西宮市

河

相

富

夫

藻のかげに金魚睡みて夕日落つ  
出雲路にて  
国引の神神の恋 草崩ゆる  
オアシスの火竹桃の色が冴え

東大阪市

落合

思月

月

未来図に酔うて二人のむつまじい  
真夜中の電話二階も起きて来る  
まだ何か云いたい母を瞳で押え

東大阪市

落合

思月

月

状勢が変り公約うろたえる  
のしつけてはみだしている下心  
乾杯のビールに明日の夢があり  
和歌山市

愛媛県 小山

悠 泉

松原市

玉

置

重

人

歩行者天国地獄のような人の波  
お茶持つて姉の見合いへ好奇心  
筆不精まめなお口で言いわけし  
カラーシャツ佐藤総理を初めとし  
若狭富士ヘドロを知らぬ青い海  
一隅を照らしこの道五十年  
脇見した隙に手元の幸逃げる  
流し元に我名刻みし石を積む  
神の指示思わぬ方へ転げゆく

大阪市

堀

口

欣

一

大

住文子

和歌山市 横内

村

ふみよ

夫

藤喜夫

家和美

藤喜夫

夫

夫



仲直りさせて仲裁飲んで去に

アルバムに祖母花嫁として残り

小説のように平和でない世相

和歌山県

ふきあげ

虎城

東京で鰯焼を買う順を待ち  
めぐるりんねの孫も酒好き

吳市

楨

渡辺

英詩

愛媛県

渡

都留逸

耳たぶに酔いが出て来た玉子酒  
夜へ赤いバラ一本を挿しておく

耳たぶの羞恥を知らぬイヤリング

今治市 渡

辺

南

奉

停年後無心に眠る父である  
断絶の世に老農の畦めぐり

備前市

武

楨

田

英詩

雲止切れ止切れ思い出もう言はず  
しあわせと思える日日へ夕焼ける

過去水に流そう水は淀んでも

今治市 伊

藤

一

郎

仏より子等に合わせた地蔵盆  
月赤く地震予知など伝えられ

寝屋川市

福

武

内

雅堂

犬搔きで昼の錢湯泳いで来

サイレント版の花火を見る夜汽車  
野分した朝菩提樹の葉を拾う

今治市 真

山

国

彦

額縁を合わせてみたい景に在り  
月の雪かポトリと一つ雨上がる

八尾市

高

高

杉

千

富

隆

子

炎据えてやる老妻の広い背

夫婦箸あちこち剝げて来ましたね  
夏風邪に夫婦で中将湯を飲み

今治市 今

野

伶

人

花

澄みきつた瞳が何か物足らず

生活のリズム始発に揺られてる

松江市

高

興

千

富

歩

子

ズンドウの妻に味覚の秋が来る

成人向映画風呂屋のビラで知り

ズンドウの妻に味覚の秋が来る

今治市 古

井

山

彦

澄みきつた瞳が何か物足らず

生活のリズム始発に揺られてる

松江市

高

興

千

富

歩

子

学割でヌードを値切る三朝の夜

石見路へ入って駅弁買い損ね

金剛登山 一句

永が生きが出来る山道苦にならず



感覚に酔うて溺れぬ年の功  
忘れぬ唄カナリヤは声かぎり

山口県

井 さちえ

人様に見えない色で塗った幸  
一言を呑みこみ円い灯を囲む

新宮市

栗 さちえ

本心を吐かす酒かと見破られ  
本心までも醉わぬ男の面構え

鳥取県

福 小 山 峻

月世界兎も見えず夢を消し  
空も海路も共々にラッシュなり

鳥取市

藤 福 小 山 峻

争えぬ小じわへ母の老いを知る  
アルバムの母別人のように見え

仙台市 川 藤 本 鎮 也

夢で見たヒント目覚めてたわいなし  
ゆつくりと旅もできない菊の秋

八尾市 古 村 映 輝

百鬼夜行都會の隅にたむろして  
親娘とは見えぬ母親ミニをはき  
世間並みに関心をもつドリショック  
失明の母へ匂いの贈りもの

大阪市 本 間 満 鶴 声

転業をしてもやっぱり壁があり  
嫁ぐ娘へ夫婦の汗を実らせる

今治市 菫 本 間 満 鶴 声

ご近所を話せば夫唯になり  
馬鹿々々が四五日聞けぬ出張中

高槻市 大阪市 木

押売りが帰り急いで鍵をかけ  
異状潮位0メートルに気をもませ

高槻市 大阪市 木

精一杯今日も働く幸があり  
無意識の大坂弁を笑われる

河内長野市 藤 森 本

勿体をつけても年齢には逆えず  
桐一葉そぞろ身にしむドルショック

大阪市 藤 森 本

父母の齡越えて敬老祝われる

鳥取市 佐々木 田 本

予約車にまかせ旅への朝を寝る

大阪市 佐々木 田 本

雷鳴におへそ押えて母の膝

大阪市 村 島 部

逃げられた魚だんだん大きく言う

大阪市 村 島 部

楽天家何でも明るくしてしまい

名古屋市 花 秀 村

古いの食欲ヒンシュクのまなこ寄る

吉 田 文 枝 繁 子

香川県 西

山 綾 子

## 真の句のねうち

### 句集「山の灯」評

橋 高 薫 風

「山の灯」とある。背にも金色の「山の灯」が光り、榎本聰夢の著者名は深い緑の山の色である。隙のない装幀は著者の人柄を思わせる。その序で近江砂人主幹は「俳句熱の旺盛な京都帝大にあって卒業後川柳に道を求められたのは、一つの見識だったように思惟する」と云つておられる。柳歴三十余年の句、三万五千の中から厳選された作品は、一口で云えば穿ちを立体にした眞の句と云うことが出来る。番傘一筋に歩んだ句風であると云うことである。

羽根ぶとんやつぱりこわい夢をみる  
かくていま思い出の辞書子にゆずり

大雪の記憶がちがう老夫婦  
使わない盆一つ菊の紋

このころの悩みは妻が推理づく  
貫録は徹頭徹尾口を閉じ

ほんとうの勇気裏切り者に見え

法科出にまあまあが氣に入らず  
七色の汗が出そうなアロハ着る  
救世軍見えざる敵へラップ吹く  
刑務所で出来た良心的な靴

古梅園きょうは借用証を書き

こう並べて見ると、いずれもの句が隙のない

著者の年輪を思わせられるのである。中に

い穿ちに裏付けられていて微動だにしない。

試歩の道味方のよう菊が咲く  
水筒がちやぶちやぶ山を下りて来る

雷のお詫びのよう虹の橋  
こだまする方にいそうな青い鳥

といつたほのぼのとした味の句もあれば、

贈られてアバタもエクボ式書評  
朝駆け夜討ちセールスのご執心

むかしから国籍不明宝船  
のよなな番傘的悪趣味の表現に頬つた句も散

見する。

筆の立つ著者であることは卷末に掲載されている「時の川柳」の企画に応募入選された論文でも推察出来ることで、番傘の總務編集長を兼ねておられる著者の強みである。

近作百句の項に掲出されている、

老醜と見たかアジビラ手にくれず

後世の史家を信じる無抵抗  
倒産のわけの一つに下剋上

わが歴史カラーページはすぐ終わる  
等の作品は更に深まつた句境を示されている

ようには思えるのである。  
川柳の眞諦である峻厳なる穿ちの味を一段と深められて、眞の句の大成に力を致せんことをひたすら希望して書評のしめくくりと致します。

▼中島生々庵主幹は「総合芸術協会」の協会推薦で理事になられた。生々庵主幹選で左の作品が八・九月号の芸術文化に紹介された。コレクションに異あり料理屋の箸枕

植切つて妻を離れたところで待ち川村好郎志

琥珀色の湯呑みの主は生き字引き西尾栄子

負けん気でなしによかつた娘が二人操

胡瓜 茄子 どっさり漬けて心満つ高橋操

ボロボロにしといて沖縄身請ける西出一栄

北浜にくすばつたまま男老け大坂形水

うつりゆく四季起き伏しを舞う扇若柳潮

忙しいやないかと税務署はめてくれ傍島静

すし屋のふきんあれも拭きこれも拭き馬

ウーマン・リブ男も産めと云いたそう新之助

不二田一三夫

# はたらくうた



国体役員 小 西 無 鬼

国家公務員 中 川 晃 男

古稀近き僕に還暦でついてくる

その理由下手にしゃべれぬ遅れ馳せ

髭剃つて夏バテ少しかくせたろ

生きている証拠の雲の峯を見る

ふるさとに住む幸螢も目高も居

六法に助けられ六法に縛られる

手錠の青年肩怒らしてすれ違い

良心に誓つて法廷嘘もつき

罰金を納めて礼を言うて去に  
有罪の判決窓の外も雪

今ちなお私一番心身を消耗さす仕事にボーカスカウトがある。二十年近く委員長と云うよりも事務、指導、上部連盟との連絡、講習会等一切、青少年育成を称えて自縛自縛と云つた形。四十年続けてなおあの世まで持ち行く川柳の足を引つ張るのはこれ。家を空けられない状況にある為とRCより特に少し補助を呉れたりするから余計に責任感でしばられる。しかしながら子供達と接觸があり、時に道話等試ると一かど若い者と同じ気持ちになりが歳も忘れる、これでも日支事変バイアス冥加な男後幾年か。

昔検事局—今検察庁、こわいお役所なりやこそ川柳が大切。アチラ生まれのアチラ育ちが敗戦のおかげで祖国の土を踏むことができて四半世紀も経つた。日本海の汐風にさらされて少しほとぎくなつたかと思ひきや、大陸仕込みのオットリ型も人間関係の複雑さに泣かされシキタリに叩かれて、島国の山陰らしく狭い小っちゃなこころに変貌。どうやら周囲が見えるようになつたと思つたら人生の方も残り少なし。人が人を調べ裁判にかけて罰金を戴き刑務所に御案内する、社会秩序を保つ為とは申し乍らあの世でエンマ様はお見通し。どうしても極楽行の切符は貰えませぬか。



# 同人特集

国家公務員 奥 谷 弘 朗

協会事務局 水 粉 千 翁

小役人 望を捨てた顔に見え  
大山を我が庭にして男生き  
自転車が性に合うのも小役人  
山男今日うぐいすに聞きほれる  
小役人口ほどにない肩の巾

白壁のシミ ふるさとの光る町  
江戸の虹 ここに倉敷川へ架け  
くらしきの路地 ニッポンの風が抜け  
旅の雨 倉敷川にぬれてよし  
安らぎの吐息を 美術館に酔い

(『倉春秋』創刊号掲載より)

昭和二十四年七月二十三日シベリヤの抑留生活を終り引揚げて、翌年の六月縁があつて倉吉當林署に拾つて戴き、農林技官と云ういがめしい肩書をもらい、もう二十一年が夢のごとく過ぎてしまった。騒音や大気汚染に悩む、都市の人々と比べて木を相手とし、山を職場としている者にとって、自然が創造する山の四季は素晴らしい。新鮮な空氣の中で仕事の出来るのは山男の特権でもある。これからも小役人の句を詠いつづけたいと思つています。

白壁の路地を抜けて美術館を横目に、倉敷川畔の白鳥にワインク、柳の並木に季節を考えながら、すらり文化財の倉造り。「これより代官所跡へ百米」の道のりを、また右へ左へ折れ曲る。朝夕十三分間の風物との対話。私の或る人生の、いまの一コマである。通産省所管、科学技術庁、工業技術院の観み。高度成長の日本経済を動かす猿真似技術を自主開発へと夢を追う、情報化時代への焦点に目を合わせ乍ら。およそ川柳とは似ても似つかぬ両極の世界でこそ、人間であり、人間たらんとする川柳に一人の愛着が生まれるのかも知れない。



# はたらくうた

紙器製造業 河内天笑

ファッション・デザイナー 宮西弥生

男一匹反旗は逃げ場こしらえず

通せんぼされても道はひとつつきり

軽四で稼ぎ乗用車で遣い

儲つていますリズムに乗つてます

天衣無縫小策は受け付けず

販売へまわされて来た口上手  
鏡前に頼る女の稼ぎの身  
ラーメンで超過勤務稼いどき  
ゴム長を脱ぐ休日へ三面鏡  
働いている者同士で口達者

たつた三年余りだけれど僕にもサラリーマンの経験があります。オールバックにネクタイ背広ビカビカの靴、なつかしい時代です。ところでこのスタイルなんばたつても僕にはピッタリ来ず「俺はサラリーマンやない」とけなげなる決心で家もとび出し電話一本ひっさげて天下茶屋の文化の二階を事務所兼寝ぐらにしてスタートしたのが現在の商店です。これは僕にとって昭和36年夏の陣でした。「与られた条件にベストを尽す」をただひとつモットーとしそれ以来仕事にも健康にも恵まれています。ほんまん人生を自ざして仕事と川柳の二本立てで楽しくやって行かたいと思ってます。

学校の先生になるつもりでいたのにデパート勤めのデザイナー。開店までの準備や掃除に徹底的に訓練され、サービスの明け暮れにすっかり飼い馴らされました。どうも外部からは優雅で香氣な仕事に見えるのですが、なかなかどうして、高所得者向きの売場に所属しているだけの話です。でも季節の衣更えや、特に結婚シーズンともなれば私達の繁忙期。花嫁衣裳にご本人以上に夢中になつて働きます。漸く出来上った時の嬉しいことは言いつくせません。やっぱり好きな道に進んでよかつたときびしくとも楽しくお仕事をして居ります。

## うどんや 有信新之助

近

況

久米奈良子

炒めてる音の割には味がです  
素うどんは売れぬか書いてないミナミ

厭な客くれたお金に頭さけ

灰皿になつて帰つたうどん鉢

立ち喰いのうどんへネオンが消えてゆく

「あんたとこのうどん食べたら、よそで食べられへん」と云つてくれる客が時々ある。それほど昔れ高き私の店へ、二三軒食堂を通り越して来てくれる、バスガイド娘達が「今度の休みに、何んか御馳走食べに行こか」と相談しているのが聞える。唯おいしさだけでは、御馳走の資格は得られぬものらしい。なるほど私の店の最高の物の五倍を出して、も、大したテキは食べられない。しかしどCKETを探して、百円玉一枚あれば、おいしいきつけが食べられる。やはりうどんは庶民のものだ。時代がどんなに変つても、うどんだけはすたれまい、と自信が湧いてくる。

発心の硯を洗う春の水  
春さぐる掌にあたたかし母心  
両輪の如く母臥し娘も病んで  
育めばポリオの筆も文字が生き  
天職とさとる正座のしひれきれ

「はたらくうた」第一回に参加させていた  
だいてから早くも六年、実りの秋を迎えたの  
に私の両手には何の収穫もないのをはずかし  
く思います。

その間、母の病氣と法事と転宅を繰り返  
し、あわただしい毎日が過ぎていきました。  
教場も二度變り、やれやれと思う間もなく

今春遂に寝こんでしまい、やむなくお稽古も  
休むことになり、大勢の人々にご心配をかけ申  
訳なく思っています。  
八月、叔母の死が転機のように、近頃やつ  
と心身ともに落ちつきを取りもどし、ありが  
たいことと思っています。  
早く作句のできるよう、心のゆとりをもち  
たいとねがっております。



## 酒田清子さんを悼む

西田柳宏子

川柳雑誌時代から姉妹作家として知られた酒田清子さんが、九月五日午後七時三十分丸六年間入院していた市立桃山病院で亡くなれた。衷心より哀悼の意を捧げます。

御家族並びにお姉様に当る一榮さん方の御配慮もあって、川柳塔社に知られたのは葬儀も終った九月八日であったので柳人の会葬は一榮さんだけだったことは私共にとっては心残りであり、清子さんも淋しかつたと思われる。

清子さんがゼンソクで入院されたのが昭和四十年八月十日である。爾来六年間病院の名物的な存在で、毎週短冊に自作の句を書いて病室や廊下を飾り、看護婦さん達からも親まれ、自他共にボスと認め、治療の過程として体質改造のため非常に肥えて貰えが充分でした。玉造句会にはよく病院を脱走(?)して出席された熱心さでした。

戦時中から戦後にかけて苦労をされ、御主人の御病気もあり本当になりふりかまわずに働かれ二人のお子様方も明るく立派に育て上

げられたのである。句会へもいつもスマック姿で入なつっこい笑顔で一榮さんとよく漫才コンビなどと笑い乍らジョークをとぼしていた姿が目に浮んで来る。ただ持病のゼンソクで苦しそうな使いが印象的だった。

春果先生が院長として赴任された頃など張切って、斗病中の作句をして居られたようである。一榮さんが入院された折など随分丈夫な存在であったことと思われます。

非常に又綺麗好きで付添いの小母さんもしては呉れたがよく自分で洗濯物など小まみては亡くなれたあとも肌につけるもので汚れものは見当らなかつたとか……。

心臓の鼓動夜のじしまの秒をよむ  
新薬へ今度こそはと言ふ期待

新聞テレビ喘息の文字見逃がさず

静かでいいだらうな貝になれたら

院長回診慌て拭いたり着替えたり

雨の日は電話で孫の歌を聞き

腹巻きをして宇治金時のお替りし

ガタガタの両手に孫がプラ下る

うすれ行く視界へ目をこすりまばたきし

## そのうきょう

### 本多柳志

◇柳志の古い句に「まだ若いつもりが席をゆづられる」と云うのがある。若い若いと思つていた私も七十に手が届くまでになつた。  
思えば長生きしたものである。学校を出て満鉄入社のための健康診断のときに、診断が全部すんだカルテを見ていた医者がそばの看護婦さんとかお見合せて「すばらしい健康ですね」といわれて、思わず胸を張つたものだ。第一生命へ契約するときも医者から「八十五歳までは私が保証しますよ。八十五歳満期にした方が掛金も少くて得ですよ」といわれて期間をのばしたこともあつた。その頃から約四十年病氣というものを知らない。とにかく達者である。末っ子であつたせいもあるが親からは、格別財産らしいものは何一つ貰つていかない私であるが、千万金にも代えがたい

こんな達者な肉体を授かっていたのだ。よくぞこんないいからだに育ててくれたものだと今頃になって亡き両親への感謝の念で一ぱいである。そんな時に出来たのが「四恩かみしめれば入れ歎きしむなり」という句である。  
◇そんな私も近頃になつて人間の年令や寿命などへのを時々考えることがある。としながら思つ。川柳に入つて二十一年、先輩や友人に励まされ、教えられてここまで来たのだが、其の間に多くの柳友先輩の死を見送つた。其のたびに所謂人の世の無情というものを感じ、人間のいのちのもうさとというものを知られ、限りないやるせなさ淋しさを味わされた。梅里さんの急死の時もそうであつたが、昨年の白柳さんの急死を報らされた時は、実際からだが震える程のショックであった。毎月の柳界展望欄で同人死去の記事を見るのは一番いやな時である。

◇人間七十に近くなると日頃達者な人でも、どこかに故障の出るものである。元気なAさ

食べられる頃には見舞途絶えがち  
心臓がも一つ欲しい世相なり  
胃袋もうんざりして胃カメラ  
主治医今日心の中もお見通し  
病室は季節無視した花が咲く  
帰る気へおせち料理を届けられ  
白黒があるから人生張りがあり  
無意識に呼吸する人のうらやまし  
調子の良い日は注射の針がこわい

思い直すまだ重患がいたはる  
私服着たナースのなんとあどけなさ  
母逝きて不幸の詫びのなし  
今日あたり孫来る予感ようあたり  
蟹は横に這うからたわむれたり  
ふところも知らず転地療法がいいですね  
元旦の白衣の勤務まぶしく見  
パジャマなど新に着替えて寿がん  
貧乏神と病の神の板挟み

んも腰が痛いと仕事を休んでいるらしい。さんも神経痛らしいといった具合に。自動車のエンジンにしても痛んでから修理は大変であるし、手おくれである。痛む前の診断が大事であり、機械を水もちさせるコツであろう。更年期は女だけのものではないらしい。柳友よ自分の健康には十二分の注意を払おうではないか。百までも生きてお互い佳い川柳を作ろうではないか。柳志も友人より早く往きたくはないが、友人にも早く往つてもらいたくはない。川柳あつての人生であり、柳友あつてこそその楽しい余生だと思うからである。

ふぐ鍋へ達者な箸がからみ合い

柳志

若本多久志著

「親ごころ・子心」二八〇円  
「老いの坂」五六〇円  
送料共

# 川柳家の暦

「川柳家の暦」は故白柳さんが数年間この取材に走りまわった労作である。十二月分までノートに書かれてあるので順を追って発表していくが、句は白柳さんが選んだもので作家の代表句という意味ではない。

(編集部)

(十一月生まれの人)

## 遺稿 清水白柳

1日	磯 部 鈴 波 M 40	丁未	大 阪
1日	日の丸を立てると酒がほしくなり		
1日	所 ゆきら M 43	庚戌	京 都
2日	鎌物師は土をぎつてはじきけり		
2日	藤 井 一二三 T 15	丙寅	堺
2日	角が取れてきたとは悲しい褒め言葉		
2日	竹 内 出樹太 M 36	癸卯	神 戸
2日	床の間のダルマ大師に父似てる		
3日	今 井 柳 堂 M 40	丁未	新 潤
3日	地球儀の日本が直ぐに見つからず		
3日	北 村 白眼子 M 28	乙未	函 館
3日	線香とマッチ泣けない男だけ坐る		
3日	柴 田 一 捏 M 42	己酉	市 川
3日	お念仏申した口とおもいつつ		
3日	宝石の世に出るまで耐えてい		
3日	阿 部 柳 太 T 8	己未	富 田 林
3日	尻馬と分かり始末書だけで済み		
3日	新 谷 笑 痴 T 6	丁巳	堺
3日	想い出となれば憎めぬ人ばかり		
3日	北 村 白眼子 M 28	乙未	函 館
3日	和やかに緋鯉寄り添う神の川		
3日	藤 井 明 朗 M 43	庚戌	東 京
3日	窓閉めて俸せな日早う寝る		
3日	小 川 恒 明 T 7	戊午	島 奈 良
3日	巣立ちする喜び眠れないんだよ		
3日	谷 井 扇 水 T 1	壬子	島 根 奈 良
3日	直つすぐに伸びる物干竿にされ		
3日	平 田 のばる T 10	辛酉	岡 山
3日	腕組んで海のしめりの町歩く		

10日	人生の約束 火葬場の煙り		10日	松 島みどり葉 M 24	辛卯	石 川
10日	ほのぼのと天唱婦隨の夜があける		10日	池 田 可 宵 M 34	辛丑	長 崎
10日	山 の 劇 上 の 山 の 霧		10日	大 高 角 嶺 M 44	辛亥	大 阪
13日	長靴の男勝さりという姿		13日	樋 口 一 峰 T 4	乙卯	守 口
13日	山 の 劇 上 の 山 の 霧		13日	平 井 青 踏 M 44	辛亥	大 阪
13日	山 の 劇 上 の 山 の 霧		13日	島 崎 顯 童 T 11	壬戌	岡 山
13日	宝 石 の 会 話 女 を 呼 び 捨 て る		13日	桑 原 狂 雨 M 44	辛亥	豊 中
15日	法 善 寺 も の 他 人 に な る さ た め		15日	桑 原 狂 雨 M 44	辛亥	豊 中
15日	兩 手 か ら こ ば れ る 砂 は 阳 に 光 り		15日	島 崎 顯 童 T 11	壬戌	高 知
15日	や め さ す か や め る か の 椅 子 守 り 抜 き		15日	島 崎 顯 童 T 11	壬戌	高 知
16日	時 が 流 れ る 足 音 が き こ え な い		16日	小 原 芳 朗 T 11	壬戌	盛 岡
16日	石 原 青 竜 刀 M 31	戊戌	16日	小 原 芳 朗 T 11	壬戌	盛 岡
16日	この次に焼く国宝はどれにする		16日	島 崎 顯 童 T 11	壬戌	盛 岡
17日	寶 物 の 応 挙 を 耻 と せ ず 旧 家		17日	島 崎 顯 童 T 11	壬戌	盛 岡
17日	深 井 凡々 M 42	己酉	17日	島 崎 顯 童 T 11	壬戌	盛 岡
17日	和 や か に 緋 鯉 寄 り 添 う 神 の 川		17日	島 崎 顯 童 T 11	壬戌	盛 岡
18日	秋 が 星 だ ら け 酔 う て 帰 つ た 風 吕 の 湯 気		18日	島 崎 顯 童 T 11	壬戌	盛 岡
18日	河 村 日 満 T 3	甲寅	18日	島 崎 顯 童 T 11	壬戌	盛 岡
18日	神 も 仏 も あ る か と 戦 後 か ら 変 り		18日	島 崎 顯 童 T 11	壬戌	盛 岡
18日	夫 婦 養 子 小 さ な 声 で す る		18日	島 崎 顯 童 T 11	壬戌	盛 岡
19日	新 岡 回 天 子 M 40	丁未	19日	島 崎 顯 童 T 11	壬戌	盛 岡
19日	老 い た り い え ど 女 と 酒 は 別		19日	島 崎 顯 童 T 11	壬戌	盛 岡
21日	森 本 鯨 波 S 19	甲申	21日	島 崎 顯 童 T 11	壬戌	盛 岡
21日	爪 切 つ て 女 の う そ が 研 か れ る		21日	島 崎 顯 童 T 11	壬戌	盛 岡
21日	横 山 た け し T 1	壬子	21日	島 崎 顯 童 T 11	壬戌	盛 岡
22日	痛 む ゆ え に この 鳥 居 に も 顔 な じ め		22日	島 崎 顯 童 T 11	壬戌	盛 岡
22日	旧暦を笑えば月月は旧で出る		22日	島 崎 顯 童 T 11	壬戌	盛 岡



## ホクロ

## 宮尾あいき選

付けボクロとに書こるコンパクト

春日

涙

タレントのホクロを真似て両

泣いた娘の頬にホクロが消えて

で

ほんのホクロ仏像のよ

見え

え

福運があるとホクロをおだてとく

初孫の握りボクロに

ある期待

佳

太陽のホクロへ天体望遠鏡

久司

和

宏

ホクロさえ美人に付けば美の要素

春日

輝

親

色白なだけにホクロがよく目立ち

失名

同

涙

鎮也

佳

女

杜月

七面山

天

軸

同窓会ホクロの位置で想い出し

春日

春

ふみよ

太陽のホクロへ天体望遠鏡

久司

和

宏

新妻のホクロみつけたハネマーン

春日

輝

親

人相の悪さホクロが輪をかける

失名

同

佳

女

杜月

七面山

天

軸

あの強いおかたにもお泣きボクロ

春日

輝

親

人相の悪さホクロが輪をかける

失名

同

佳

女

杜月

七面山

天

首筋のホクロみつけた初デート

春日

輝

親

人相の悪さホクロが輪をかける

失名

同

佳

女

杜月

七面山

天

軸

ホクロまで取って他人になりすま

春日

輝

親

人相の悪さホクロが輪をかける

失名

同

佳

女

杜月

七面山

天

軸

確認に役立つホクロとは悲し

春日

輝

親

人相の悪さホクロはいじめ

失名

同

佳

女

杜月

七面山

天

軸

ホクロまで親に似て孫誕生す

春日

輝

親

人相の悪さホクロはいじめ

失名

同

佳

女

杜月

七面山

天

軸

ホクロ今まで取って他人になりすま

春日

輝

親

人相の悪さホクロはいじめ

失名

同

佳

女

杜月

七面山

天

軸

ホクロ今まで取って他人になりすま

春日

輝

親

人相の悪さホクロはいじめ

失名

同

佳

女

杜月

七面山

天

軸

ホクロ今まで取って他人になりすま

春日

輝

親

人相の悪さホクロはいじめ

失名

同

佳

女

杜月

七面山

天

軸

ホクロ今まで取って他人になりすま

春日

輝

親

人相の悪さホクロはいじめ

失名

同

佳

女

杜月

七面山

天

軸

ホクロ今まで取って他人になりすま

春日

輝

親

人相の悪さホクロはいじめ

失名

同

佳

女

杜月

七面山

天

軸

ホクロ今まで取って他人になりすま

春日

輝

親

人相の悪さホクロはいじめ

失名

同

佳

女

杜月

七面山

天

軸

ホクロ今まで取って他人になりすま

春日

輝

親

人相の悪さホクロはいじめ

失名

同

佳

女

杜月

七面山

天

軸

ホクロ今まで取って他人になりすま

春日

輝

親

人相の悪さホクロはいじめ

失名

同

佳

女

杜月

七面山

天

軸

ホクロ今まで取って他人になりすま

春日

輝

親

人相の悪さホクロはいじめ

失名

同

佳

女

杜月

七面山

天

軸

ホクロ今まで取って他人になりすま

春日

輝

親

人相の悪さホクロはいじめ

失名

同

佳

女

杜月

七面山

天

軸

ホクロ今まで取って他人になりすま

春日

輝

親

人相の悪さホクロはいじめ

失名

同

佳

女

杜月

七面山

天

軸

ホクロ今まで取って他人になりすま

春日

輝

親

人相の悪さホクロはいじめ

失名

同

佳

女

杜月

七面山

天

軸

ホクロ今まで取って他人になりすま

春日

輝

親

人相の悪さホクロはいじめ

失名

同

佳

女

杜月

七面山

天

軸

ホクロ今まで取って他人になりすま

春日

輝

親

人相の悪さホクロはいじめ

失名

同

佳

女

杜月

七面山

天

軸

ホクロ今まで取って他人になりすま

春日

輝

親

人相の悪さホクロはいじめ

失名

同

佳

女

杜月

七面山

天

軸

ホクロ今まで取って他人になりすま

春日

輝

親

人相の悪さホクロはいじめ

失名

同

佳

女

杜月

七面山

天

軸

ホクロ今まで取って他人になりすま

春日

輝

親

人相の悪さホクロはいじめ

失名

同

佳

女

杜月

七面山

天

軸

ホクロ今まで取って他人になりすま

春日

輝

親

人相の悪さホクロはいじめ

失名

同

佳

女

杜月

七面山

天

軸

ホクロ今まで取って他人になりすま

春日

輝

親

人相の悪さホクロはいじめ

失名

同

佳

女

杜月

七面山

天

軸

ホクロ今まで取って他人になりすま

春日

輝

親

## 課題吟

通訳

工藤甲吉選

# 初歩教室

題「地」

本田 恵二朗

めて下さって、それを根底として、佳吟を生み出して欲しいと願う。

※

※

地玉子と書かねば玉子と見なされず 賴次  
思った通りを文字にすることは、まことに素直なことなのだが、川柳と銘打つには、ただ素直では通らない。もう一と苦心が肝要だ。

(地玉子と名乗つて卵店に出る)

墓参団夫の眠れる土地に伏し

前述と同様素直だが、伏したという感慨を句

姿そのものに、じみ出させる工夫が肝要。

(この地下に眠る夫よ墓参団)

容赦なし豪雨は造成地をねらい

とらえた句材を、如何にして川柳として表現

するかと、苦心のあけくれこそ楽しいことで

あり、人間陶冶の好手段ともなるのだ。

(造成地雨台風に喰みつかれ)

妊つたらしい地金も顔を出し

苦吟の跡が見えるが、もう一步前進だ。

(妊つたらしい地金がちょっと出る)

地統きに建て増し幸待つている

幸でもよいが、ピントをぐつとしばって、

(地統きに建て増し良縁待つて)

地道に歩いて歯がゆくみられて

ていで結ぶのは、お古いよ。

(地道に歩けば歯がゆく見られ)

地下足袋はたいて今日の疲れ癒ゆ

(地下足袋の疲れはたいて今日が満ち)

疲れが癒えただけでなく、今日が悔いなく満ちたとするなら、明日への姿勢も前向きであることを意味して、力強い句となるよ。

六根の意を、この教室の皆さんが噛みし

好きなればこそ意地悪い口も利き 利  
材はよいのだが、表現に味がないよ。

(意地悪を言いおうてる好きおうてる)

澄み切つて大地の汚れ知らぬ空 葵水

(天高く大地の汚れ知らぬけに)

手の平の地から日暮わり大空へ 繁子

(露地裏でひまわり空をこいしがら)

地味な人目立ちもせぬが奥ゆかし 久子

(ゆかしさがちらほらこぼれ地味に生き)

地下街をウロウロして道迷い 濁水

(ちょっと面白くないよ。脳味噌をしほれ) 水

(地下街でクイズみたいに迷わされ)

騰る地価マイハウスなど夢の夢 満津子

(建てる夢尻目に地価がつづ走る)

土地買えど家は建たずに草ぼうぼう 隼人

(草ぼうぼうために地価がつづ走る)

地下鉄の出口に迷いなれぬとこ 比呂路

前句同様に説明句の見本だよ。

(地下鉄の出口が迷え迷えと言ふ)

新墓所国から先祖も迎えて来

(新墓地へくにのこ先祖迎え入れ)

月笑う地には公害てんわんや

(公害の地球を月があざ笑う)

空を突き地にもぐり地球の狭き

(天を衝き地にもぐり地球狭くする)

地下の駅こほろぎ一家が住みついた 敏

(地下の駅こほろぎ一家へ宿を貸し)

土地売つて農家に過ぎた家を建て 双葉

(農地売つたらしきぞでつかく建てよつた)

地図出して旅の楽しさ繰り返す 綾女



大萬川柳

「捨て石」

入選発表

選者中島生々庵

入選七士

捨て石を知らず相手は調子つき

特攻隊捨て石にして國破れ

龍門

統分が骨は拾つてやると云う

中盤戦捨て石一つ効いてくる

鳥取春海

大明新之助

鳥取無門

當て石のつり定年まで董か

倉敷翁 章

大阪滋省

第二百四十四回（四十六年度第十回）

# 大萬川柳 「捨て石」

入選発表

捨て石の心を拾わねばならず 米子瑞枝	捨て石は没後の知己を求めてず 大坂柳志
捨て石の限界入院して悟り 岡山葵丘	捨て石の隨所に生きて立志伝 神戸どんたく
捨て石となつて遺骨も帰らない 大坂十止庵	捨て石でしたと定年ばかり云い 大阪水客
捨て石を知らず相手は調子づき 東大阪肖二	捨て石の無駄を若さが口にする 平田代仕男
特攻隊捨て石にして国破れ 大田双楽	捨て石の人生などと思うてず 平田代仕男
捨て石のような息子に養なわれ 大田軒太樓	華やかに生きて捨て石など知らず 大田軒太樓
捨て石の決意社風にメスを入れ 大坂章雅	捨て石のいつか世に出る日を信じ 大坂章雅
捨て石のつもちよい／＼飲ましと 大坂双楽	捨て石の覺悟を妻にとがめられ 大坂双楽
捨て石になる氣で移住銅羅を開き 大坂軒太樓	捨て石となる氣の辞表叩きつけ 大坂軒太樓
捨て石になる氣で仲裁乞うて出る 大坂章雅	捨て石となる氣の辞表叩きつけ 大坂章雅
捨て石となる運命に生れつき 岡山白水	捨て石は御免ですよと向き直り 岡山白水
捨て石も辞せず明日の策を練る 大坂一三夫	捨て石へさすが老猿のつてこず 大和郡山カズエ
捨て石になります票を集めます 大坂新之助	捨て石の過去は忘れるに至る 大和郡山カズエ
捨て石になる氣でにぎる紙テープ 今治昌道	碁盤目の隅で捨て石光つて 大和郡山カズエ
捨て石のよう再婚すすめられ 大坂新之助	捨て石となる氣荒土に挑む鍬 大和郡山カズエ
捨て石になる氣を締めさす別居 今治昌道	合併の人事捨て石らしい椅子 大和郡山カズエ
捨て石へ故人の偉大さを偲び 大和弘生	捨て石でいいさと長兄学を捨て 大和弘生
捨て石となる無医村にペタル踏む 大和阿茶	捨て石にされて沖縄復帰待ち 大和阿茶
捨て石は後につづくを信じとり 大和阿茶	捨て石にとも気スパイを買って出る 大和阿茶
捨て石となつた自爆の部下に触れ 東大阪生長	捨て石となつた自爆の部下に触れ 東大阪生長
捨て石も出来ない程に追込まれ 大坂誓二	捨て石も出来ない程に追込まれ 大坂誓二
捨て石のつもりで過疎の山護る 大坂保夫	捨て石のつもりで過疎の山護る 大坂保夫
捨て石のよう再婚すすめられ 大坂保夫	捨て石のよう再婚すすめられ 大坂保夫
捨て石となる氣を締めさす別居 大坂翁童	捨て石となる氣を締めさす別居 大坂翁童
捨て石へ故人の偉大さを偲び 大和弘生	捨て石へ故人の偉大さを偲び 大和弘生
捨て石となる無医村にペタル踏む 大和阿茶	捨て石となる無医村にペタル踏む 大和阿茶
捨て石は後につづくを信じとり 大和阿茶	捨て石は後につづくを信じとり 大和阿茶
捨て石となつた自爆の部下に触れ 東大阪生長	捨て石となつた自爆の部下に触れ 東大阪生長
捨て石も出来ない程に追込まれ 大坂誓二	捨て石も出来ない程に追込まれ 大坂誓二
捨て石のつもりで過疎の山護る 大坂保夫	捨て石のつもりで過疎の山護る 大坂保夫
捨て石となる氣を締めさす別居 大坂翁童	捨て石となる氣を締めさす別居 大坂翁童
捨て石へ故人の偉大さを偲び 大和弘生	捨て石へ故人の偉大さを偲び 大和弘生
捨て石となる無医村にペタル踏む 大和阿茶	捨て石となる無医村にペタル踏む 大和阿茶
捨て石は後につづくを信じとり 大和阿茶	捨て石は後につづくを信じとり 大和阿茶





能登原 恵二朗・生々庵推薦

新同人紹介

レゼントで一週間北海道の旅を楽しめ、一ヶ月早い北の国の紅葉を鑑賞、定山渓、扇雲、ウトロ、摩周湖と泊りを重ね十九日には弟子屈でくつろがれた。『錦繡のその名も神居古潭かな』と句信を寄せられた。

▼白百合川柳会（岡山県）九月例会は九月十八日邑久町公民館で開催。

（）は九月二十六日青森八甲莊で開催された第十三回全国政川柳大会へ出席、わざわざ会場を訪問された工藤甲吉氏と歓談、同夜は大庭桂月で名高い萬温泉に泊された。『紅葉へ湖酔う

』と句信を寄せられた。『た色となり』

▼林蒼蛇樓氏（ホノルル市同人）は寺院の要務を帯び馬咲島へ約一ヶ月の予定で出張された。

▼笠原吸江氏（藤井寺市同人）は来春卒業の高校生求

人のための学校訪問に宮崎鹿児島二県へ出張。九月九日南市から旅便りを戴く。

▼中島小石さん（大阪市同人）は十月二十四日（日）正午から毎日ホールで開演

の小川流舞踊公演に出演、「しづのねだまき」を舞わ

れた。

▼越智一水氏（今治市同人）

は九月二十一日（日）中央公民館で開催。

▼河内天笑氏（堺市同人）の嚴父柴三郎は七十四歳で

柳大会は十一月七日（日）午後一時から西宮市民会館

で開催。兼題・歴史・紹介

・射る・快心。講演「川柳

と西宮」中村東角氏。各題

三句・投句は十一月五日ま

で西宮市前浜町三の二七

福島郁三宛。

▼菊田いさむ氏（京都市同人）の嚴父淡治郎氏は九月十八日急死、心臓代償不全のため死去、行年七十五才。葬儀は九月二十日自宅で営

（）は十月十日の六十九回目の誕生日に、句集「ねつす」を発行。▼山田季賛氏（高槻市同人）は九月十三日本曾御岳山へ登山、頂上は快晴だったがこのほど院人（）は右耳上の人（）は耳上での小さなコブを切開手術で入院している。だがこのほど院人（）は耳上での小さなコブを切開手術で入院している。

▼長谷川三司氏（尼崎市同人）は右耳上での小さなコブを切開手術で入院している。

▼河内天笑氏（堺市同人）の嚴父柴三郎は七十四歳で

九月二十二日天寿を全うされた。柳大会は十一月七日（日）午後一時から西宮市民会館

で開催。兼題・歴史・紹介

・射る・快心。講演「川柳

と西宮」中村東角氏。各題

三句・投句は十一月五日まで西宮市前浜町三の二七

福島郁三宛。

▼内藤きよ子さん（岸和田市同人）十月十五日の民謡

大會のため大忙し。早く川柳へ本腰を入れる日を待つておられる。

▼南海川柳会（）十一月十八日午後六時

（）は南海電鉄本社食堂で開催。午後六時

（）は松崎二丁目以和貴荘

（）は堺市川柳同好会

（）は東大阪市川柳同好会

（）は南大阪川柳会（）十一月二

（）は鐵永和駅前、中央公民館

（）は二集会室一題、風・初対面第

（）は十日午後六時

（）は十一月二十七日午後六時

（）は先東大阪市下小阪七

（）は竹中肖二宛。

（）は午後六時

（）は

# 46年度一賞発表句会と

## 同人総会

10月3日 御 堂 会 館

### 席題「ガイド」

橋高薰風選

つき子・花梢・凡吉・明陽軒・宣介・雀踊子  
・尚二・綾女・あいき・君子・形水・美佐子  
・儀一・恵美子・牧人・誓二・吸江・一二三  
・季賛・葉子。

七月の路郎忌川柳大会と同じ御堂会館の文化教室で、本年度の二賞発表句会と同人総会が開かれた。会場正面に式次第のはり紙がある。それに、(栗氏の名調に会が進行する)

開会の辞 (小松園氏)

議長選出 (生々庵主幹が、今日『川柳塔』

のあるのは故路郎先生と同人諸氏のご協力によるものと感謝の意を示められた。)

経過報告 (薦風氏が、路郎忌川柳大会、白

柳氏の急逝、それによる新役員の就任。句集

刊行も、『清水白柳遺句集』万的、杜氏の

的、栗氏の『水鶴笛』が注目を浴びた。

各地川柳大会へは主幹以下出席して親睦をは

かるなど近来にない動きを見せた。)

会計報告 (多久志氏はこまかい数字を読みあげ、川柳塔の健在を報告された。)

役員改選 (生々庵主幹が別項63pのよう

うに新役員の名をあげ承認をもとめられると異議なしの声から賛成の拍手にかかる)

質疑応答 (バッジ、同人増加など質問があつた。)

閉会の辞 (小松園氏)

四時半に総会が波静かにおわり、会場内の食堂へ、それぞれ夕食をとりに出で行く。

五時半にはお目あての二賞発表句会の幕あ

きだ。路郎賞の尼緑之助氏が出雲から、川柳塔賞の生信笑子さんが山内静水氏に付き添われ竹原からはるばるの出席である。

受賞者には、楯と賞状と生々庵主幹の色紙が主幹の手から授与されると拍手の嵐が起

る。おめでとう。

月間賞は香川醉々氏にかがやいた。おめでとう。(句会の司会は鬼遊氏、わきどりは天笑氏、写真は新之助氏)

(河井庸佑整理)

出席ー新之助・生々庵・葵水・与呂志・栗・一三夫・滋菴・醉々・一治・古方・十郎・多久志・天笑・庸佑・静歩・鬼遊・柳志・万的・文秋・百酒・太茂津・小松園・静水・笑子・野迷路・メ女・静馬・摩天郎・春果・弘生・緑之助・薦風・双葉・竹莊・葛城・操子・幸代・狂二・一舟・美房・喜風・維久子・

長距離をうまいガイドに乗り合わし

ガイド役一夜漬けとは思われず居眠りの強制もしてバスガイド

雲がなければ説明もガイドするそのうちにいうやろと思たらガ

ガイドして明日の夢をまき散らす又の日を約し別れるバスガイド

旅日記ガイドの善意書きとめる子の嫁に眞踏みもされているガイド

別嬪のガイドにバスは素直なり日本語も混せてガイドの如才なし表情もいれてガイドのコンクール

光堂テープにガイドして貰うバスガイド左と右が違うなり

旗持つたガイドへつづく戎橋ローカルの売娘ガイドもしてくれ

種切れになつてガイドは唄にする市長さん御みずからガイド振り景色どころかガイドの顔にまだ見

ガイドの名おぼえて降りターミナルガイド指先からこの虎になつているガイドさえ知らぬ穴場をよく調べ観光地ガイドの笛の中に入る伊豆の旅ガイドお吉に早交りマイク手に握ればガイド標準語

つき子・花梢・凡吉・明陽軒・宣介・雀踊子  
・尚二・綾女・あいき・君子・形水・美佐子  
・儀一・恵美子・牧人・誓二・吸江・一二三  
・季賛・葉子。

わく詩想ガイドの歌にこわされる  
手袋の白さをガイドおしみなく  
ガイドから聞いた知識を言いふらす  
ガイドが唄ううたに合わせて凡夫婦  
だらしない客のお守りもするガイド  
喋るだけ喋らせガイドほつとかれ

一三夫 生々庵 恵美子 太茂津

高野山ガイドの声も澄み通り  
美人ガイド都大路が蘇えり 小松園  
バスガイド古典文学地理歴史 柳志  
頼まれて頼んでガイドさん多忙 笑子  
ガイドが指す空が汚れて衰しくなる 恵美子  
故郷を思うガイドこの歌唄うとき 薫風

維久子 驚天笑 醉葵花 驚天笑 醉葵花  
小松園 宣介 生々庵 弘生 桃竹馬 駒馬  
柳志 一三夫 恵美子 春静 桃竹馬 駒馬  
古方 古方 滋雀 滋雀 滋雀 滋雀

現役羨やまず焚くほどはもつてくる 古  
現役としての生き甲斐しみじみと 多久志  
朝の改札まだ現役の足で出る 万的方  
現役を去る日土俵を振り向かず 片腕と言われ現役復帰する  
現役を惰性のままできた鎖り 現役でいえないことをいつてやめ  
ヤングパワー現役古参を脅かし 現役を離れてからのお父ちゃん  
現役としてベンチから見てるだけ 現役に隠居が戻るドルショック  
現役を飽かず休まず仕事せず 判捺してまだ現役という誇り  
現役のパリパリ童顔持つて いる 現役にお齢を聞いて叱られる  
現役にお齢を聞いて叱られる セめてもの誇り勇退したつもり

追われてる気持王座につきまとい  
青春をぶつけて確保する王座  
ボス猿の蒸発箕面の秋ふかむ  
しごかれて道ひと筋にある王座  
ボス既に次の王座を知つて  
上ずつた声で王座の持つマイク  
頃も秋大横綱の髪を切る  
敗北の笑顔王座にある未練  
スポーツを浴びて王座にいる孤独  
うばわれてうばつて王座の偉大なる  
闇かわせ闇かわせ王座のダニ生きる  
一斗樽王座に据えた草相撲  
勝ちとった王座に受けて立つゆとり  
王座からドルが降りる日のショック  
正眼の構えに王座ゆるぎなし  
波に似た遠吠え意識した王座  
一系の王座時代の中に生き  
王座とはプロに通ずる細い道  
徒らに沸いた王座でない光り  
ドル不安王座崩れる音がする  
納税の王者ゆさぶるドルショック  
給料日だけが王座の膳につく  
王座指す勝負は搖らぐ紙一重  
グレープフルーツ王座の香り漂わせ  
王座死守汗と涙のインタービュー  
王座への近道はなし迂回する  
入荷今日王座へせまるサンマの値  
王座から見て戦雲のまだ消えず  
王座いまノックアウトで入れ替わる  
根性と努力についてきた王座  
勝つだけの王座に涙などはない

雀祥一千花久好秀藤日双形喜喜葛万静誓凡醉与笑葵滋弘一形凡宣醉春  
踊三月夫代梢司一子持滿樂水風風城的麥二吉夕吉子水雀生三水吉介夕里

権花記録 一朝 王座はも  
また 王座へ一

文なり  
迫り  
滋  
雀  
水

書きはみんな樂しく酔っている  
書きへ万物流転の風が吹き  
公を持つ女寄せ書き細々と  
書きに個性が見えぬボールペン  
書きに踏倒された名を見付け  
バイになる寄せ書きとあとで知、  
書きは大陸時代からの仲  
書きに天才詩人の右下り  
として書く寄せ書の位直があり  
書きはじやこ寝のよき名を連らね  
書きは横書きたて書き斜書き

寄せ書きはみんな楽しく酔っている  
寄せ書きへ万物流転の風が吹き  
過去を持つ女寄せ書き細々と  
寄せ書きに個性が見えぬボールペン  
寄せ書きに踏倒された名を見付け  
アリバイになる寄せ書きとあとで知  
寄せ書きは大陸時代からの仲  
寄せ書きに天才詩人の右下り  
ボスとして書く寄せ書きの位置があり  
寄せ書きはじゃこ寝のよき名を連らね  
寄せ書きは横書きたて書き斜書き  
兼題「ハンドル」  
若本多久志選

ハンドルの疲れへ人形揺れてみせ 軒太樓  
ハンドルへ母の祈りもしがみつき 千代  
生きてゆくハンドルにもある信号機 一治  
逆境のハンドルしかとにぎりしめ つき子  
ブレークのきかぬハンドル持つ生活 君子  
教習所のようにハンドル動かない 形水  
自信ないハンドル女乗せたがり 儀一  
ハンドルはホットパンツの娘がにぎり 久美  
ハンドルを持つ身お神酒は形だけ 一二三  
子が出来てからハンドル恐くなり 幸代  
お守りを信じハンドル良く動き 操子  
ハンドルを握ればわいて出る力 葉菜  
ハンドルの主失語症ほどもの言わせず  
ハンドルの交替は居ず七曲り 百酒  
ハンドルを切ったとこまで覚えてる 静水  
ハンドルはここから中仙道どう家並 野迷路  
ハンドルを片手に女軽く抱く 葉菜  
指さしもあるハンドルを信じ切り  
ハンドルを切ったとこまで覚えてる  
ハンドルはここから中仙道どう家並  
ハンドルを片手に女軽く抱く  
一三夫 春巣  
十郎 静歩  
小松園 葉子  
明陽軒 葉子  
萬的 葛城  
葉菜 葉菜

▼路郎忌句会兼題「七」GMP七つの海を舞  
台とし・野迷路。

★

表情を殺し合いつつ調室  
喪服着た代理の至極無表情  
ウレシイお顔させてカメラの無表情  
オーバーな表情をするガラス越し  
誘惑をする表情は別に持ち  
平手がきそうな表情になつてきた  
日本の表情ドルにうるたえる  
ギヨックとした表情刑事見逃さず  
能面に似た表情を持ち歩く  
ノーコメント表情固いまま終わり  
表情もかえぬ女の嘘を聞き  
表情はもう許してもよい微笑  
生活の疲れがさせる無表情  
無表情が精一ぱいのレジスタンス  
表情も豊かアメリカ帰りなり  
表情が小さな泡になつた蟹  
表情に気付き話題を急に変え  
金の要る話しに父は無表情  
母と娘の会話へ父の無表情  
表情の冷い女にした整形  
表情はみんな覚えたコンパクト  
心経一巻本尊のお顔ちごで見元  
表情の豊かな人で疲れ切り  
産院へ見舞う表情整える  
対話の表情すでに負けている  
定年の表情たっぷり墨をする  
豊年の表情おかめ鈴を振る  
苦しんだ表情でなしデスマスク

葛城 菊水 葵水 敏 蕪風  
新之助 文秋 つき子 一三夫  
花梢 新之助 宣介 摩天郎  
久司 一二三 雀舗子 鬼遊  
幸古 久司 章雅 代方  
十郎 吸江 春 川

川柳塔社常任理事会  
十月二日が常任理事会だった。いつもは四月なので忘れた人が多かつたようだ。  
集まる人は、古方、庸佑、多久志、柳志、  
生々庵、蕙風、小松園、いさむ、一三夫諸氏  
が、あすに迫った二賞発表句会や同人総会な  
どについて協議する。  
前号にも書いたように、生々庵主幹は公私  
共に多忙である。それがために副主幹二氏、  
副理事長五氏ということになった。川柳塔も  
大世帯になつた。  
川村好郎氏の戦列復帰で、いよいよ活気を  
とび、川柳塔に進軍ラップが鳴る。

色紙短冊  
書画用品

いつからか他人の顔と街で会い  
表情の硬さも受話器から伝い  
何度でも表情変えぬ見合歴  
嬉しさをガツチリ表情受けとめる  
表情もええすにダイヤねだられる  
我が道を行く表情にない妥協  
一二三  
千代藤持誓二  
百水葵水

兼題「表情」

北川春巢選

▼路郎忌句会兼題「七」 G M P 七つの海を舞台とし一野迷路。



親と子の夢がもつれ、進学期  
まだ夢を見ているような当りくじ  
せせらぎへ夢もとけ込む伊豆の宿  
パートタイム電化の夢に追いつけず  
一緒に寝ても夫婦の夢は別  
将来の夢で喧嘩をした二人  
髪染めて老いには老の夢があり  
子の夢に合わせて今日も背伸びする  
ぜいたくなベッドでこわい夢をみる  
百万都市の夢も出来てる青写真  
蟻のように小さな夢を追うわたし  
手に取ってみると憧れの虚しさよ  
子に夢を睹け下積みに耐える汗  
現実にもどればひとり風の音  
目覚しで夢でよかつた汗をふく  
人世の喜劇に逃げる僕がいる  
奥様も御一緒なつと旨く逃げ  
仲居逃げ出した酒席の高笑い  
輝和遊仙  
人世の喜劇に逃げる僕がいる  
奥様も御一緒なつと旨く逃げ  
逃げるにも女の線はくずしてず  
小松園  
カロ女  
峯田  
公女  
雪女  
蒼鶻  
紅溪  
万里歩  
曉舟  
椰子郎  
河舟

ウイロー社(ハワイ)  
汐風が浮かぶ雑念吹きとばし  
さりげなく汐風に立つ頬さびし  
汐風を胸一杯に今日を生き  
汐風が椰子の葉裏を縫うて吹き  
物想う女に汐風強すぎ  
磯馳松吹く汐風に身をまかせ  
洗面所へ入歯忘れて脇につき  
物忘れかけた眼鏡をさがしてて  
物忘れすまいと結んだ指だのに  
去る者は日日に疎し忘れがち  
物忘れするなど言いつつ又忘れ

清水白柳遺句集

送料共 ￥700

逸翁（故・小林一三翁）遺愛の  
茶器を中心としたコレクション  
を、展示・公開している  
ユニークな美術館です。

口上はとんとこの節物忘れ三石  
握手した旧知の名前浮び出す北海  
川柳わかやま 垂井葵水報

一年は巡る病窓夏の雲一郎  
一年の利子これだけにひつかかり春亭  
一年中見守つて来た菊の鉢つとむ  
一年の婚約モラ良く守り竜  
かぶと虫欲しいしこわし一年生みさお  
嫁かぬまま満で数える年がふえ弘生  
一年でもう主導権確保する照代  
一年目嫁もボツボツふくれ出しおせい  
表札が未だ生きている一周忌城石  
手さぐりの一年だった今日の幸太茂津  
人間の巣作り下手を蜂笑う佐一郎  
自家用で出ても働き蜂として十郎  
女王蜂あんなにもてて見たいもの延伊知

昏れてなお未だ蜜蜂は残業し  
みやげ買う働き蜂は千鳥足  
養蜂家花を追い追い甘い旅  
クインビー都會の夜をよく稼ぎ  
風流に養蜂花を追う旅路一  
定年の日まで毒舌やめられず保  
毒舌が出来ぬ出ないで気にかかり  
毒舌も世帯を持つてややにぶり  
その実はオッチャヨコチヨイの毒舌家  
暖かい目に毒舌がふと迷い  
毒舌をかわすジョークが冴えている  
ハンカチを洗つてくれてからのこと  
白いもの白く洗つて心足る  
岸洗う波に弧愁をくすぐられ  
復元の城へネオンがとどきそう  
久司智栄一  
四坊榮  
一風美裕  
保夫裕美  
ふみ一光  
千寿子一  
花仙陽  
峻紀世

好奇心また来た道へ 戻らせる 佳宵

川柳たけはら 世話好きが寝ついて事がはからず 季

お茶持つて娘の見合いへ好奇心 ふみよ

好奇心見てならぬもの見てしまい 久司

カタカナの母のひと筆胸を衝く 岐

水茎の跡うるわしく病んでいる 弘生

弘法もその日の都合筆を選る 佐一郎

もてあますひまに浮んだ好奇心 まさお

幸運の筆はダルマの目を入れる 照代

法律氣ものが斜めのものが気に入らず 酒

好奇心足跡だけの雪男 佐一郎

留年の親の欲目が崩れだし 立葵のぞみ

好奇心負けじと犬も貌を出す 延伊知

斜めからまだ叱つている視線 安代

テレビ見る妻は斜めの位置が好き 保夫

断崖の斜めの松でよく撮られ 十郎

斜めから世間見つめる齡となり 醉

好奇心足跡だけの雪男 佐一郎

好奇心負けじと犬も貌を出す 延伊知

斜めからまだ叱つている視線 安代

テレビ見る妻は斜めの位置が好き 保夫

断崖の斜めの松でよく撮られ 十郎

斜めから世間見つめる齡となり 醉

好奇心足跡だけの雪男 佐一郎

好奇心負けじと犬も貌を出す 延伊知

斜めからまだ叱つている視線 安代

テレビ見る妻は斜めの位置が好き 保夫

断崖の斜めの松でよく撮られ 十郎

斜めから世間見つめる齡となり 醉

好奇心足跡だけの雪男 佐一郎

好奇心負けじと犬も貌を出す 延伊知

斜めからまだ叱つている視線 安代

テレビ見る妻は斜めの位置が好き 保夫

断崖の斜めの松でよく撮られ 十郎

好奇心足跡だけの雪男 佐一郎

好奇心負けじと犬も貌を出す 延伊知

黄銅六角ボールトナット

及び特殊換物全般

## 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地

TEL 三四五二一四  
夜間 一四四〇八

蘭房子子

吉清

天石庵

紫苑莊

五湖

五湖

五湖

五湖

五湖

五湖

五湖

五湖

## 役員新陣容成る

同總同同同副理事長副主幹理主事長幹務

企劃部長

北川 西尾 柏果 春果  
若本 多久志 桑原 小林  
川村 好郎 松園 菊沢  
正本 水客 正本 水客  
橋高 薫風 橋高 薫風  
大坂 形水 大坂 形水  
傍島 静馬 傍島 静馬  
吉田 圭井堂 吉田 圭井堂  
戸田 古方 古方 戸田

会計部長 金井 文秋  
句会部長 菊田 さむ  
編集 不二田 三夫  
参事以下は前号発表通り。なお編集部に河井庸佑氏が前号に洩れていました。

▼近作柳樽選者・ ★

中島生々庵 不二田 三夫

菊沢小松園 西尾 葉

若本多久志 川村 好郎

北川 春巢

The advertisement features a large, stylized logo at the top. The word "ケネスピリー" is written in a bold, italicized font, with a registered trademark symbol (®) placed above the letter "e". Below this, the text "オーストラリアから来たファッショ" is written in a smaller, regular font. In the center of the page is a large circle containing the brand name "KENNETH PIRRIE" in a serif font, with "Matsukaze" written below it. At the bottom of the page is another logo consisting of a diamond shape with a stylized character inside, next to the text "大阪天満橋 松坂屋" and a phone number.

さんづけて呼ぶたありの不自然さ  
喜びの日本酒初老の二日酔  
遮断機に待たされ郷里をふと想う  
一つ皿つづいて夫婦ことたりり  
むつかしい話へつづく子のあくび  
七人の敵へ罠なぞ仕掛けまい  
乳児検診同級生の顔も見え  
バラ祭りここまで匂い運んで来  
まんざらでないよと鏡が言つてくれ  
お給金しつかとこの手で稼ぎます  
壺の幻想雲が下り女人舞う  
わしと言う方言ぬけぬまま五十  
小百合はどきれいじやないが笑い  
打たれたる老牛一瞬何思う  
行商に今日も張り切る五月晴  
崩えてみて燃えはならぬ恋と知り  
淨美百合春昇己政妙不雅秀子  
日出鬼延英詩子

夢見てるおでこにそつとパパのひげ  
ポケットに入金をなくしてから氣付。  
敗戦の将は語らず選挙のみ  
スクランムを組めば個人の顔が消え  
恋の不安まだ喧嘩したことがなし  
生きているこんなところにも屋台店  
窮すれば通ず人生また楽し  
タレントの強みあなたの不動票  
よそ目だけの平和こわれるかも知れ  
毎日が父の日少うし酒が飲め  
ことしから妻にいわれずすだれ吊る  
同情に負けてはならない孤独感  
小企業ゴールデンウイーク<sup>さき</sup>知らず  
アクセサリー近い女の腕時計  
共稼ぎ素直に育つ子を信じ  
子が一人寝つきほのぼの孤にひたる

城北明朗会（大阪市）川口弘生報  
回診の儀式のような聴診器弘生  
聴診器お腹にあてておめでとうシゲ  
聴診器ボロでもキャリア物を言い浊水  
聴診器まるめて相談事にのり葵水  
聴診器に一本だけと許される三十四  
聴診器と永いつき合いこの辺で繁子  
御臨終ですと静かに聴診器進  
お医者さん聴診器もつて目がすわり久子  
恋しててる胸を知ってる聴診器隼人  
聴診器強心臓やなと思ひ春巣  
清掃車乙女の祈りでやって来た満津子  
胃の手術切腹したと負け惜しみ太茂津  
目を入れてくれと待ってるダルマミ秀村  
夏やせに輪をかけている片思い小路  
片思いせめて写真を抱いて寝る贊平

川柳塔社同人総参加！（一人二句以内）

## 新年号を飾る「ユーモア特集」

（十一月二十五日着便）

川柳に忘れられているものはユーモアである。そのユーモア味のある川柳で新年号を飾っていただきたいのです。

## 年賀広告受付！

本誌五分の一段が千円です。  
グループをおもちの方もご利用ください。

★原稿締切・十一月末日

あなたもぜひ一口

この寸法が二百円

川柳塔社

振替口座大阪  
三三三六八番

新年号発表（11月15日締切）

川柳塔（10句）中島生々庵選

近作柳樽（10句）川村好郎選

課題吟（各題5句以内）

「自転車」出原敬一選  
「孝行」横山一声選  
「マナ」西森花村選

募

川柳塔（10句）中島生々庵選  
近作柳樽（10句）川村好郎選  
課題吟（各題5句以内）  
「非常ベル」辻  
「赤字」石坂新雪選  
「産院」石川侃流洞選

二月号発表（12月15日締切）

川柳塔（10句）中島生々庵選

近作柳樽（10句）川村好郎選

課題吟（各題5句以内）

「非常ベル」辻  
「赤字」石坂新雪選  
「産院」石川侃流洞選

## バッジの图案締切迫る

定価百八十円（送料十六円）

半年分 千百七十九円（送料共  
一年分 二千二百円（送料共）

昭和四十六年十一月二十五日印刷  
昭和四十六年十一月一日発行

編集人 中島蓬太郎  
大坂市南区鰐谷仲之町二〇番地

印刷所 大陽印刷株式会社  
郵便番号 五四五二  
大坂市南区鰐谷仲之町二〇番地

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字  
は楷書で新かなづかしいにしてください。

★川柳塔欄の投句は本社同人に限りません。  
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

## 本社十一月句会

日時	十一月六日（土）午後六時
会場	以和貴莊（いわきそう）
電話	阿倍野区松崎町二丁目 622-1275番
正論	吉田圭井
「ボウラ」	菊澤静馬
「横文字」	金井文秋
「芸」	傍島選堂
「無」	本水客選
「論」	小松園選

会費  
二百円

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います  
大阪市南区鰐谷仲之町20

川柳塔社

12月の兼題「家元」「サイレン」「駐車場」「帰省」

川柳塔社

発行所 電話大阪・二七一・三九八五番  
郵便口座 大阪・三三三六八番



創刊和和  
四四四四  
大正年年  
正月年年  
三月二月  
年年年年  
日十九  
通行日日  
卷印第三  
行日日  
四号可

川柳塔  
十一月号

南紀 和歌山 四国でのお泊りは

# 南海サービスチェーン

＜ホテル・旅館＞

◆白浜温泉

国際観光旅館

朝

日

◆徳島鳴門

国際観光旅館

鳴

門

国際観光ホテル

ホテルパシフィック

国際観光旅館

鳴門公園ホテル

◆勝浦温泉

国際観光旅館

中の島

◆紀北橋本

觀光旅館

紀の川苑

◆湯峰温泉

国際観光旅館

湯の峯荘

◆泉南淡輪海岸

觀光旅館

淡の輪苑

◆新和歌浦

国際観光旅館

萬波

◆大阪なんば

ホテル南海

お問合せ・お申込み 南海交通社  
日本交通公社・サービスチェーン  
大阪案内所 06-(631)-0222

# 南海電鉄



一番よい酒  
うまい酒

清  
酒

# 菊正宗

宮内庁御用達  
菊正宗酒造株式会社  
神戸・灘・御影

定価  
百八十円  
(税込十六円)